

各地の新聞よりみた

長崎から京都までの仏骨奉迎

川口 高風

明治三十三年六月十九日にバンコクを出発した仏骨奉迎使一行は、七月十一日に長崎に着き、仏骨を皓台寺（長崎市寺町）に安置して上陸会を修行した。十五日には長崎を出発し諫早、博多、小倉、門司、徳山、神戸を経て十七日に大阪に着き、四天王寺（大阪市天王寺区四天王寺）に安置して拝迎会が開かれた。十九日には四天王寺を出発し、京都の東本願寺（京都市下京区烏丸通七条上る）に仮安置した後、妙法院（京都市東山区妙法院前側町）まで行列を整えて妙法院宸殿に奉安され奉迎会が行われた。そこで、長崎に到着してから京都妙法院宸殿に奉安されるまでの様子をながめてみたいが、その間の経緯は岩本千綱・大三輪延弥『増補仏骨奉迎始末』（明治三十四年四月 仏骨写真発行所）や葦名信光『御遺形奉迎紀要』（明治三十五年九月 日本大菩提会本部）にも報告されている。しかし、ここでは仮奉安された各地の

各地の新聞よりみた長崎から京都までの仏骨奉迎

新聞記事よりその様子をながめてみたい。また、皓台寺には安置されていた期間（七月十一日より十五日迄）の雑費の収支である「雑費記」を所蔵している。それもここに紹介してみたい。

「雑費記」は庶務係の浅田純夫、有馬寛竜、高木竜法、石田界雄、江口竜口、樋口湛時、石田知寛の七人と会計の城後定吉によつてまとめられたもので、入会金や香資、賽物による収入金は七三三円十二銭五厘であつた。それに対する支出の出費金の明細を知庫の佐伯実宗や典座の石原大溪が報告しており、皓台寺に残っている明細は第六、七、十三、十八、十九、二十三号で、その他は不詳である。

凡例

一、本稿は「鎮西日報」「大阪朝日新聞」「大阪毎日新聞」「京都日出新聞」「朝日新聞京都附録」に掲載されている仏骨奉迎関係の記事を採録した。

一、翻刻にあたり仮名使いは原文のままとし、旧漢字は新漢字に、変体仮名はすべて平仮名に改め句読点を付した。なお、明らかな誤植は訂正した。

長崎にて（七月十一日より十五日）

「鎮西日報」

仏骨物語 非仏房非骨（明治33年7月11日 第六五二七号）

はしかき

恐ろしく有り難かる老人が、水ツ鼻をすゝりつゝ、余が寓を叩いて是非にくぐとせむるものから、余も亦不人情にふりきる訳にも行かず、ソンなら話して聞かそうと、セキ払ひ一つすれば、即ち仏骨物語となる。

一 至急御派遣相成りたし。

たしかに一昨年のお事だと思ふよ。印度のカヒラバスツという処から、東の方に當つてヒブラハワと云ふ処の里程かね。それは五六里もあるだらう。そうだよ可笑しい名前だペツペといへば、唾をピツカケることだが、そうではないのだ。本當に人の名前だ、此の人が所有して居る地面の内に、古墓があるので、是を掘つて見ようと云ふので、ソロ／＼掘り初めた。すると凡そ二丈ばかり掘つた所で、鉄の先にコツリと當つた。サア掘り當てたと云ふので、丁寧に土をさらへて調べて見ると、色々なものが埋めてあつたのだ。へ、い。

- 一 石櫃一個
- 一 水晶及び蠟石瓶二個（一個に記銘あり）

一 遺骨及び遺灰

一 塗灰及び木皿の破片

一 寶石及び種々なる裝飾物

右様なものが出たのだ。そこでペツペ殿は早速にパスチと云ふ所の収税官なる、ラマサンカーと云ふ人に知らせた。ハ、だまかすのじやないよ、是も人の名だね。そして蠟石瓶に書きつけてある銘文を見せた。ところがサンカー先生に其字が解からないのだ。それだもんだから、印度の梵語学者の博士ホエイ氏に見てもらつたのだ。ホエイ氏も中々解らない。それから色々と研究をした。すると解かつて来たね。どう解かつたかと云へば、こうなのだ。右の遺物は御釈迦様を茶毘した後、其の兄弟のサカヤスと云ふ人が保存して居た品だと云ふことだ。此の事は昨年の二月十七日発売のピオニール雑誌に、博士ホエイ氏自ら論文を草して、之を確證して居るとの事だ。またペツペ殿が右の遺物を発見したる事は、ロイヤル、アヂヤチツク、ソサイの報告書に記載してあるとの事だ。序だから話して置くが、即ち茶毘と云ふ事も、日本の言葉じやないのだよ。たしかに釈氏要覽だつたと思ふ、左の通りに書てあつたようだ。

闍維、或は茶毘と云ふ。或は耶維とも云ふ。又闍毘とも云ふ。正しく梵には闍鼻多と云ふ。此には訳して梵焼と云ふ。

サアそれからペツペ殿が、右の遺物を暹羅の国王に献じた。それはねこういふ訳だ。全体暹羅と云ふ国は、恐ろしく仏教の流行して居る国で、国王でも坊主を拝む位だと云ふことだ。イヤ／＼日

本の仏教とはすこし違つて居る。暹羅の仏教は南方仏教と云ふて小乗教だ。しかしカラリと間違つては居ないのだ。左様くイトコ同志位と見てよろしひ。それだから仏教繁盛の国王に献じた。

サア其の辺は知らないが、右の遺物が果して釈迦の骨やら、其當時の物であれば、仏教徒にとりては得がたい品だから、随分ペツペは金をもろうたかも知れぬよ。兎に角暹羅国王は右の遺物を大切に、次で仏教の盛なる国々には、右の遺物を分配してやろうとの御思召で、シーロン及びビルマ、日本、の三国に別けてくださるとの事なのだ。しかし日本へ分配の事は、暹羅バンコック府の本邦公使たる、平門秀才の聞へ高き稲満先生より申請せられたとの事だ。或はそうであらう、そこで稲満先生は本年の二月を以て、日本の各宗管長に宛て左の意味の書簡を送られた。其の書簡は長いから意識すればこうだ。

各管長御機嫌よろしう。さて世界に於ける宗教の大勢を察するに、三大宗教（仏、基、回）の中にて仏教は前後印度より支那日本に伝はりて、数億方の信徒を有して居ることだによつて、一朝好機会ありて南北仏教の信徒に、一塊石の如く固結したらんには、必ず世界に雄飛し得べき勢力を有して居る。そうなれば実に二十世紀の文化の上に一大光明を發揮すると云ふものだ。小口にしては日本の各宗が打つて一丸となり、大にしては世界に於ける仏教徒の一致となり、次で仏教界の一新時期を画し、暗中の大飛躍を試むる事をも得べく、是等は今日仏教界の急務であつて、各宗僧侶の責任は然るべき事ではないか。小生

各地の新聞よりみた長崎から京都までの仏骨奉迎

は仏教一新の好機到来したることを喜ぶ（中略）特に暹羅国王陛下には右の遺物を空前の盛式を以て迎へられた。（中略）又今一月にはシーロン島及びビルマの両地よりも委員を派遣し来りて、何れも盛式を以て奉迎して帰った。然るに国王は日本へも分頒せんとの御聖旨である。実に小生は之を以て仏教一新の好機と存ず。抑も聖遺聖物なるものは、要するに教徒の熱心を昂かめ渴仰を加ふることの至大なるべきかは、言を待たずして明かなるべき事にて、彼のロシヤ国モスコ府の、カセドラル、オフ、アツサンプシヨン、に於ける、黄金龕中基督磔刑の古釘の如き、常に巡拝の善男善女をして随喜の涙を落さしむるが如き、或はクリミヤの大戦亦其遠因をゼルサレムの事に発し、或は独帝のゼルサレムに巡拝せられたるが如き、所謂聖地聖物なるものが如何に欧米の人民に渴仰せられつゝあるかを推知し得べし、今回の事の如き実に空前絶後にして、特に国王陛下が日本の仏教界に対し聖物御贈与の聖旨に出でられ、且つ日本より派遣の委員に対しては、謁見の厚待をも賜はるべき旨外務大臣の通知に接したれば、日本仏教各宗を代表し、各派の中より成るべく高德博學にして英語を能くする仁、数名を委員に撰ばれて、至急御派遣相成たし云々。（まだある）

● 仏骨の渡来（奉迎使一行の着帰） 仏骨迎齋の爲め暹羅国に渡航せし同奉迎使大谷光演師一行は、予報の如く英郵ロヒラ号にて、本日午前當港着の筈なりと。右に付き、九州各地及び長防芸州地方の僧俗は、昨日當り迄に来崎せしもの多しと。而して大波

止より上陸し、其筋は外浦町、大村町、興善町、桜町、勝山町、馬町より出来、大工町を経、中通り筋を酒屋町へ、磨屋町より寺町へ出、皓台寺へ入ると。

仏骨物語 非仏房非骨〔明治33年7月12日 第六五二八号〕

二 三十六派の共進会

そこで各宗の名僧知識たちが、剃りたての頭からポツポと湯気をたて、会議に及ばれた。すると議論が二派に分れた。先づ真言宗の小林と云ふ委員が発起をするようには、

成程仏骨である以上には、之を奉迎して尊崇するは當然のことであるが、抑もベツペと云ふ人が掘り出したるものは、正しく我々がフヤジの骨であろうか。或は馬骨牛骨の物ではあるまいか。これは一応本邦から印度にまかり越して、審査した上の事としては如何で御座る。ホイソレとあはて、チンカラカンの大騒ぎをやらかして、奉迎はすんだは、其品は真赤の偽物だと来た日には、目も當てられた事ではなからう。列座の大徳如何で御座ると広長舌をふるつた。

するとは是に賛成をしたのが浄土宗だ。成程其の通りだ。兎角、今日此頃は、人造金の世界だで、一も二もなく人造の流行だ、昔くは銀ながしとか、天プラとか金ぎせとか云ふたものだが、今は天から人造を来るからたまらない、兎に角これは考へものだと云つた、列座の大徳も各ウムと溜息を鼻から漏らして小首をひねる、すると佛光寺派からの秀員は、右の説を駁して左の如く言つた、

イヤ夫れは御念の入つたる御説だが、実は粕念で御座る。ナゼならば、右の仏骨は果して真正のものか、或は人造かと云ふ研究時代は過ぎた事で、今日では真正の物として、英領印度政庁から暹羅国王に奉つた。(前号にベツペ氏が奉献したとあるは誤り) 暹羅国王にをかせられては、已に真正の物として尊崇せられ、それを分与せんとの御聖旨だ。且つ大日本を代表して其職にをる稲垣公使に於ても、真正の物として各宗管長に通牒に及ばれた。右の品物を研究して真物か偽物かをたしかめ、然る後下さるとあらば、夏も小袖と云ふ氣になつて頂戴しては如何だと言ひ越されたのではないのだと、シツペイ返しをした、

ところで列座の高徳は右の両説に對して、各意見を戦はし甲論乙駁をした末に、仲裁説が出て審査もするがよし奉迎もするがよし、何もよし彼もよし、よしよしと話が纏つた。

すると日本新聞に、雪嶺と云ふ文士が、僧侶に勧むと題して左の如く書いた。

実は暹羅に奉迎委員を派遣するに先つて、審査委員を派遣するのが正當だが、そうしては暹羅国王に對して穩當を欠くから、回国王の御思召の通り、本邦より奉迎委員を派して、頂戴するがよろしひ。然し一も二もなく外国人の説を確信するといふは大早計ではあるが、今回の仏骨は昔日の仏骨とは違ふて、頗る確實のようではあるが、外国にも種々の人物が居つて、偽物や贋物を製作するものも少くない。ウイルヘルムテルの弓は俵藤太の弓より怪しいけれども、而かも麗々と博物館に飾られてあ

る。右様の訳だから欧州とて油断も透も有つたものでない。もつとも今回の事は正確に調査せられた事であるのだから、ペツペ氏やホエイ氏を疑ふにはあらねど、随分邪推をすれば邪推もされる。特に欧州人は仏骨だからとて有り難く思はないから、其真偽を決定するにも熱心でない。ホド／＼の研究をしてマヅマヅと済したかもわからぬ。だから日本の仏教徒も、ペツペとホエイとの両氏の保證のみにて、諸信決定するは実に軽卒だ。暹羅やビルマやセーロンの如き国は一も二もなく外国人の説を信ずるとしても、我が邦の學術は彼等と同等ではないから、右の事を黙々として聽従するは、実に我国の体面を汚すといふものだ。だから右の事件に就ては、一方に二三人の審査委員を派し、一方には沢山の奉迎員を派して、盛に之を尊迎するが至當だ、云々。

先づ大体右様に成立したる事にて、各宗の協議もホドホドに確定せられ、愈々暹羅に向つて奉迎員を派遣せられた。最も右の奉迎員は審査員をも兼て居るので印度に回る無との事だ。而して長崎御着は愈々来る十一日と極はまり、皓台寺に於て三日間大法会を執行せらるゝとの事だ。且つ誰人にも金壹円奉納の者は右の大法会に参列することが出来るも、礼服着用でなければ許さぬとの事だ。定めて其當日は古今未曾有の事だから、九州一円の僧俗男女は、ズンズン、汽車より汽船より長崎に集まるであらうが、夫にしても見物すべきは各宗各派打ち込みの大法会、ナムカラタンやら、ランアボキヤやら、自我得物来南無妙法蓮花経やら、南無

各地の新聞よりみた長崎から京都までの仏骨奉迎

釈迦牟尼仏、南無阿弥陀仏、南無大師遍照金剛、トホカミミタマへ天理王の命（マサカ）など、一見八家九宗三十六派の共進会始まり、左様ツと木の頭にて幕。

●仏舍利の渡来（奉迎使一行の着船）〔明治33年7月12日 第六五二八号〕

仏骨迎齋の爲め暹羅国に渡航せる奉迎使の一行は、仏輿に供奉して昨十一日午前十時、英国郵船ロヒラ号にて當港に到着せり、前日の雨は、昨朝に至るも降りしきりたるが、恰も着船の際は小降りとなりて、傘を用ゐる程もなき迄に雨歇みしかは出迎、又は參觀者は、大波戸より梟庁前に至る迄充滿し、精靈流しの夜も斯くはあらじと思はれたるが、着船と同時に一発の烟花打揚がり、仏輿及び奉迎使一行は、聽て二隻の小蒸汽にて大波戸に着せしかば、先払一人口輪棒二人は、通路を開いて行く。引續きて六金色の二旒の旗を捧げたる後より、団体総代、各宗派寺院総代、地方奉迎係各二人つゝ、隔し次に、亦六金色の旗旒を捧げ、奉迎本部員二人之に随ひ、次に仏旗を樹て、金欄にて纏ひたる仏輿は五条衣の僧二名にて之を昇き、之に次ぎて又一旒の旗を捧げ、上り藤紋の旗を捧げたるは奉迎使且大谷光演師略衣にて、これに續きて副使日置黙仙師等、奉迎員一同随行し、其後より各宗派寺院僧侶及総代、徽章使用者、団体総代等無量数百名参列し、午前十一時半頃市内皓台寺に入着し、仏輿は本堂正面の高座に安置し、参列者一同焼香をなし、読経を了して退散せり。

▲奉迎正使 大谷光演師及随行長南条文雄師等の十余名以上、筑後町迎陽亭に投錫し候、副使日置黙仙師は皓台寺に在錫せり。又昨夜は□谷説教場に於て法会を行ひしと、久留米仏教会及婦人会、長崎仏教青年会等の各会員其他當地方は無論、九州各地長防等の地方より参詣者多く、□内の殷賑言ふ量りなかりき。

●仏骨奉迎煙火 別項の如く昨日の仏骨奉迎に付、発揚したる煙火の目録は左の如し

昼の分

国旗○迅雷○仏旗○時雨煙竜玉吹○花中より達摩○舞鶴○雷鳴
 黄煙双竜玉吹○白蓮花○柳連○竜曲○夕立□□奴風○馬上軍人
 ○玉追竜玉吹○柳玉光より曲○三羽鳥○玉煙分煙砲○道成寺○
 国旗より靈鷹○雷鳴乱竜曲○瓢○名誉旗○白菊○菊花遊蝶○小
 菊○木柳○五色風玉○白煙○雨中の燕○松の露○雨中双竜時雨
 の曲○水平○鷄○玉柳分枝柳○雲中の雁○達摩美人○金魚遊水
 ○陸海軍旗○白菊小割○月夜鳥○夕立○柳下遊鮎○老松○連烟
 竜より曲○仏旗○玉煙柳下時雨○竜田川○白雪○桜花○靈竜玉
 吹○星烟後に四方引○末広計、□十発

夜の分

雷鳴乱竜玉吹○柳連星より時雨の曲○萩の露○柳に打分星○色
 別火砲○雨中双竜玉吹時雨○金星○彩露寒木○浅黄鹿の子○滝
 下の螢火○晴□下煙竜玉吹○時雨□段○雷後月下乱竜玉吹□□
 柳○柳下飛螢、計十五発

仏骨奉迎使歓迎の交渉 (明治33年7月13日 第六五二九号)

同使は予報の如く、明後日まで本市皓台寺に於て法会を営み、直航帰京の筈なるも、各派は千載一遇の事なれば、帰途各所の歓迎を受けられんことを請はん、と続々本市に來りて交渉する処ありしが、特に門司市にては、各宗聯合仏骨奉迎会なるを組織して、各寺より僧侶の外重なる檀徒より委員五名宛、都合三十五名の委員を撰出し、更に五名の常務員を撰び歓迎の趣向を凝らし、其委員長生田不仁臣氏と南禅寺派臨濟宗僧侶一名を、本市に派して奉迎準備員に交渉せしに、同員にては臨時委員会を開くこととはなりたるに、議論百出して協議纏まらず。然るに門司の奉迎会よりも派出員生田氏の許へ、若し陸路門司に立寄りなくして海路神戸に直航とならば、菩提会寄附金は一致協同反対す、との打電頻々到來するより、生田氏は迎陽亭なる一行の休息所に到りて、前田正副使及南条、石川の両氏に面談して陸路上京の事を申込みたるも要領を得ず、一行某の説話に依れば一刻も早く帰京を急ぎ、海上には殆んど倦たれば陸路を希望するも、歓迎準備派出員の意見に托するの外なし。又暹羅國磐谷府にて同国王に拝謁して、万□の要件も運びたれば、帰途積尊の遺跡地を巡視せんとの計図なりに、同国王より來暹の途次は孰れに立寄らるゝも随意なれと、大事の要件を帯びながら自俣の巡視を為し、万一故障の生じたるときは本国に対して如何なすや、との忠言を畏みて帰途を急ぎたるものなりと。故に前陳の如く早く帰京して、任務を完ふして安堵せんことを希望するものなれば、有志者の意に逆ふも遺憾なら

んとの挨拶に、生田氏も困して、更に本部よりの派遣員が一昨夜来□せしを待ちて尚交渉せし結果に依れば、愈々明後日午後三時、本港より玄海丸に乗じ門司へ寄港の際、同船にて門司馬関の奉迎者に遥拝せしむることに決して、生田委員長も昨終列車より帰門せりと。因みに門司寄港の際は、関門の有志者は団平船数百を小蒸汽船に引かして、一行の乗船を取囲みて拝崇する筈にて、音楽隊は博多より招聘し烟花五十発を打揚げて、盛大なる奉迎式を挙ぐる計画なりとのこと。

仏骨の□輿（奉迎使一行出發）〔明治33年7月15日 第六五三二号〕

市内皓台寺に安置中なる釈尊遺形は、本日午後三時、本行列を以て大波戸に齋送し、玄海丸にて関門及門司を経て、京都に向はん筈なるが、當港着の當日よりは風雨を侵して、各地方よりの参拝者曳きも切らず。八家九宗の仏教徒は、當市に充満したるが五日間の滞在の事として、附近村落よりは一家曳り合ひて参詣をなすもの多かりしが、瀬戸村等よりも六金色の旗を寄附せし由なるが、若し好天気ならんには無慮一万の人は群集するならんと云ふ。

仏舍利の發程（奉迎使一行）〔明治33年7月17日 第六五三二号〕

皓台寺滞淹中の仏舍利は、奉迎使一行之を供奉し、一昨日玄海丸にて京都に向はん予定なりしも、海上の都合にて玄海丸入港延期となりたるより、前夜に至り俄かに変更し、一昨日正午十二時發

の上り列車にて門司へ向け出發せしが、昨朝無事安着せりと。當日は雨天なりしにも拘はらず、各地方より僧俗大黒町より停車場に至るまで拝送者郊路に充ち、尚道ノ尾停車場等へも通路拝礼者多数あり。非常の盛況なりしが、若し陸路發程の順序となり居らんには、沿道の参送者到る処充満すべきなりしが、各駅□□通過を知らざる者の□□しと。

長崎より大阪へ（七月十一日より十九日）

「大阪朝日新聞」「大阪毎日新聞」

「大阪朝日新聞」

仏骨迎齋使（長崎）〔明治33年7月11 第六六二二号〕

明日寄港すべき仏骨迎齋使の一行を迎へんとて、市中は国旗灯笼を出し甚賑はへり。

仏骨迎齋使の一行〔明治33年7月12日 第六六二三号〕

唯今（昨日午後三時過）一行は、光泰寺に於て迎齋の仏骨を本堂に安置し、東本願寺法主の挨拶あり。法会を執行し、参詣者夥だしりて、一行は向陽館に入れりと。長崎なる同事務所より電報し越せり。

仏骨来着（長崎）〔明治33年7月13日 第六六二三号〕

予定の如く仏骨迎齋使帰着せり。出迎ひ盛なり。

（以上前号欄外）

仏骨到着日割〔明治33年7月13日欄外記事 第六六二三号〕

□次記載したる暹羅より迎齋したる仏骨の到着、日割左の如し。

昨十二日長崎港着船、同十三四日の両日長崎に於て上陸会衆、十五日午前長崎発車、午後三時二十三分門司着、車門司より小蒸気船にて馬関に到り一泊、十六日馬関出發、徳山迄乗船、徳山午後十時五分発列車にて出發、十七日午後零時三十分梅田停車場着、直に天王寺に入り、十八日同寺に於て拝迎会を開く。十九日午前六時三十分天王寺停車場発車、同七時四分梅田停車場着、七時三十一分官設汽車に乗換へ出發、八時五十分京都七条着、直に大谷派本願寺へ入り、午後同寺より行列を整へ、五条通りを経て大仏妙法院に仮安置す。

仏骨迎齋の事〔明治33年7月13日欄外記事 第六六二三号〕

別項記載の如く、同迎齋に就き、當地四天王寺の準備を聞くに、當日は聖徳太子の輿も西門石の鳥居迄出迎へ、太子の輿先導にて同門に入り、金堂にて参拝し、夫より二王門を南へ出で、同門前にて東西に別れ、太子は西、仏骨は東へ各廻廊外を北へ六時堂に入る順序にて、同堂を駐輿所とし、同所に入りたる時は、直に古式の典供并に舞楽を二三奏する計画なり。又一説に十五日馬関一泊の事は止めて、十七日朝神戸上陸し、直に汽車にて梅田へ向ふとの事に改りたりともいへり。

仏骨迎齋の事〔明治33年7月14日 第六六二四号〕

既に一説として掲げたる明十五日馬関一泊の事は、愈模様替となり、長崎より海路神戸へ直航する事に改りたるが、梅田着の時間

は尚未定なり。同駅着の上は近傍便宜の所に休憩し、夫より桜橋を南へ、肥後橋南詰を東へ、西横堀西側を南へ、筋違橋を東へ、高麗橋通を東へ、堺筋を南へ、日本橋筋を南へ、今宮商業倶楽部前を東へ、四天王寺西門へ入る都合なり。

仏骨迎齋の事〔明治33年7月15日 第六六二五号〕

予記の如く仏骨迎齋使の一行は、去る十一日午前九時長崎に着帆したれば、出迎人並びに信徒の面々、宿雨漸く晴れたる路の泥濘をも厭はず、埠頭に群集して其の上陸を了るまで間断なく烟火を打揚げ、一行の寺町皓台寺に至る沿道の人家は、尽く国旗を掲げて歓迎の意を表し、見物の男女は市街の両側に立列びて雑沓言はん方なく、其□寺に着するや先仏骨を本堂に安置し、奉迎正使大谷光演師は、出迎人其他一同に向ひて、暹羅国王より积尊遺形の一分を拝戴して優渥なる勅語を賜はり、無事に帰朝したる旨を挨拶的に演述し、夫より各宗僧侶の読経法要を執行したるが、當日参集せし善男善女は、無慮一万余人と註せられ、さしにも広き本堂の内外は殆んど立錫の地を余さざりきといへり。右一行は門司各宗派より上陸を懇請し来れど、都合に依り門司にも馬関にも上陸せず、本日午後出帆の玄海丸に乗込み、明後十七日午前八時神戸に入港する事に定めたるが、當地梅田駅着の時間は尚未定なる由。駅着の上は近傍便宜の所に休憩し、夫より桜橋を南へ、肥後橋南詰を東へ、西横堀西側を南へ、筋違橋を東へ、高麗橋通を東へ、堺筋を南へ、日本橋筋を南へ、今宮商業倶楽部前を東へ、

四天王寺西門へ入る筈なること既記の如し。

仏骨迎齋の事〔明治33年7月16日 第六六二六号〕

同一行の道程日割は又亦変更し、航路を取らずして広島より上陸し、汽車に搭じて明十七日神戸駅を経て、同午後零時三十分梅田駅に着すべし。之に就て大谷派管事伊沢道一師は、昨朝宗務を帯びて神戸に出張し、四天王寺の信徒諸講中も、一昨々日来各協議を凝しをれり。又明後日四天王寺に於て執行する舞楽の目録は左の如し。

振鉾二節、万歳楽、延喜楽、安摩、八仙、太平楽、胡德楽、陵王、納貫利

仏骨発着（門司）〔明治33年7月17日 第六六二七号〕

夫の仏骨迎齋の一行は、昨夜鉄道に由り長崎より着し、同夜十一時発の聯絡船にて徳山に向け出発せり。発着の際は、車軸を流す猛雨をも厭はず、送迎人多く頗る盛んなりき。

仏骨迎齋の事〔明治33年7月17日 第六六二七号〕

迎齋正使大谷光演師の一行が、暹羅国磐谷府にて仏骨を授受したる略況は既記せしが、猶當日の様を記さんに、六月十四日は国王に謁見の日なれば、同国宮内省より日本公使館へ宛て三台の馬車を差廻され、迎齋正副使は稲垣公使と之に同乗し、随行諸師は他の馬車を駆りて宮門に入れば、衛兵は左右に排列して捧銃の礼

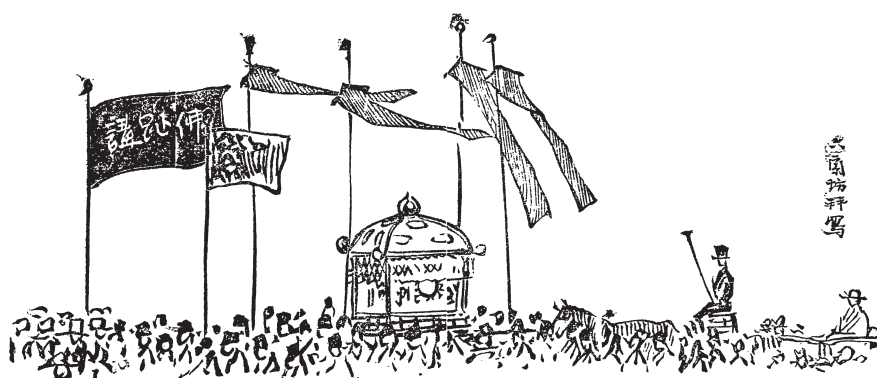
を為し、同宮内、文部二大臣は、一行を導きグラントパーレスに入り、暫くありて国王は出御あり。胸間に各国の勲章を佩びさせられ、威容儼然たり。王は大谷正使より順次に藤島、前田、日置の各副使に対し、握手の礼を行はれ勅語を賜ひしを、文部大臣が英訳し、随行長南条文雄氏之を和訳したり。宮内大臣は、国王の誕生簿を把りて各師をして出生の年月日を自署せしめ、是日の式は了り、翌十五日に至り、午後四時祇園寺に於て仏骨授受の式あり。各奉迎使、稲垣公使夫妻、随行人、公使館員等参列し、文部大臣は英文の朗読的演説をなし、暹羅新旧各派の僧侶数十名、椅子に倚りてパーツ（宝珠形扇）を捧持し、経文を誦し、文部書記官は、小形の金塔を把りて正使に授け、是に於て各迎齋使、稲垣公使は金塔を開きて靈骨を拝せる後、更に準備の如意宝珠形の金函に金塔を収め、錦囊に容れ二重の桐箱に封じて、前田師之を馬車に移し、一行之に供して帰館せり。是夜各迎齋使は金函に封印を附し、帰朝の後、各管長立会の上開函する筈なり。この後一行の滞留数日間も鄭重なる待遇を受けたりといふ。

仏骨神戸着 [明治33年7月17日欄外記事 第六六二七号]

仏骨迎齋使の一行は、別項の如く昨夕神戸に着したり。兵庫県庁差廻の馬車にて諏訪山、中の常磐に入れり。神戸駅へは各宗僧侶及信徒等数千人出迎へたり。一行は今日午前十一時三十分、神戸駅発車にて當地に来る筈、又右に付本邦駐留暹羅公使ヒヤリチロング・ロナジエリト氏は、別項の如く昨日東京より京都に着し、

今日當地に来らん筈。

仏骨迎齋 [明治33年7月17日欄外記事 第六六二七号]



大谷正使

積尊の遺形一分を暹羅国王より請受けて、崇敬宝重たらざるなく、万里の波を凌ぎつゝ、帰朝したる迎齋正使大谷光演師の一行が、此程長崎に着帆せし事までは別欄に再三記し、が、一行は予定の如く一昨日午後四時四十五分、山陽線の列車にて神戸に着き、諏訪山の中常磐に一泊し、更に昨日数多の送迎者に擁せられて汽車に搭じ、安養寺山に打揚ぐる一発の煙火と共に神戸を発し、梅田駅に着したるは午後零時四十分なりき。その着車するや後藤助役は市を代表して出迎へ、二人の僧は恭しく夫の仏骨を納めたる金函入の櫃を担ぎ

て、北川プラットホームの待合所に入り、一行等総て此処に小憩し、此間に金函を櫃より輿に遷し、午後一時始めて予定の行列を整へて練出し、桜橋を南へ続々と四天王寺に向ひぬ。輿の前には午前中京都より来りし暹羅国公使フィヤ、リッデイロング、ロナチエツド氏一頭立の馬車を駆り、輿の次には正使光演師府庁差廻しの二頭立の馬車を進め、又次に副使等馬車にて従へり。その前後は各宗各講の僧俗男女、各定の記章を胸間に掛け、毎団体に旗を押立て、洋服和装こきまぜて、流るゝ汗も拭ひあへず練行き、三時といふに漸う四天王寺に到着せり。沿道の両側は見物人の山を築き、自然の車止となり、恰も今日の御霊祭もこの雑踏に圧せられたる様なりき。猶行列の大概を録せば、

五色旗、空也堂、天王寺各講中、仏日新輝旗、仏跡旗信徒
代、樂器講、遊行寺、天王寺講、信融社、花講、大谷派信徒、
天満別院、難波別院、大阪婦人会、妙法寺花園教会、万福寺、
山科別院、信徒総代、本派本願寺、日蓮宗、神職二人、真宗仏
光寺派、大阪吉祥講、大日本施薬院、五色旗、各宗管長、暹羅
公使、府庁前田〇、青年会、立正安国会、天台宗、念仏宗、浄
土宗、錦旗、仏骨輿、正使、副使、各宗僧侶、信徒。

仏骨迎齋彙報（京都）〔明治33年7月19日 第六六二九号〕

大谷派信徒の組織せる保信会が、新調したる同派定紋附十八畳敷大の旗十六本を、七条停車場より同寺附近迄、一昨日来樹て列ねたり。▲本日仏骨来着の節は、行列者の便に供する為、七条停車

各地の新聞よりみた長崎から京都までの仏骨奉迎

場前より其道筋なる烏丸通より、五条通伏見街道を経て、洛東妙法院迄四十余町の道路に、広さ三間高さ五間に、天竺金巾にて天幕を張りたり。晴雨とも傘を用ひざるためなり。▲其道筋の両側には罫を設け、雑沓を避く。▲停車場に到着の際は奏樂す。▲停車場南手の畑地及妙法院近傍にて、當日は各百発づゝの信徒寄附煙火を打揚ぐ。▲大谷派本願寺にては、石川舜台師を委員長に、其の他の僧俗六十六名の掛員を任命せり。▲西本願寺にては、光尊法主病中に付、代理として連枝近松尊定師、大阪に出張迎齋す。▲當日は東本願寺の信徒、各地方より出京する向頗る多く雑沓すべければ、七条停車場より時宜に因り、臨時汽車を出すべし。関西鉄道は各駅より草津駅まで三割引往復切符を発売す。

仏骨京都に向ふ〔明治33年7月20日 第六六三〇号〕

四天王寺に齎し、仏骨は、予定の通り昨日午前六時四天王寺を發し、同三十分天王寺駅より汽車にて梅田に着し、夫より官線に由りて京都に向ひたり。其間の行列は来阪の時に比して極めて軽便なる者にて、金函に入れある仏骨は錦の裂にて包み、新調の白木の辛櫃に納めたるを二人にて昇き、先導は二三の仏旗、供奉は大谷正使及小人数の講中のみなりき。去れど梅田停車場には、拝観人非常に夥しく、仏骨の同駅に着するや煙火を打ち揚げ、プラット、ホームには各宗信者の簠數十本押立てあり。仏骨を収めたる白木の辛櫃は、二名の僧侶奉持し、大谷正使之れに従ひ、北側のプラット、ホームを渡りて待合室に入り、即て京都行の列車に乗

り替へ、先づ辛櫃を奉乗し、大谷正使等同室に乗り合ひ、各宗僧侶の京都まで見送りたるもの数十名ありしといふ。曾根崎署の本多署長、鬼丸警部、下村警部等は、十数名の巡査を率ゐて警衛したり。

仏骨京都に入る〔明治33年7月20日 第六六三〇号〕

仏教本山の所在地にして崇仏の徒多き京都にては、仏骨奉迎の盛況はまた格別なり。五条より以南東西本願寺附近の各戸は、「奉迎」と白地に染め抜きたる紅提灯と仏旗とを掲げ、幔幕を張り屏風を引廻し、多くは業を休みて歓迎の意を表し、十八畳敷の大旗十六本は、七条停車場より東本願寺前に列べられ、同寺前より妙法院門前迄、路筋凡そ四十町は、青竹の埒を以て雑沓を防ぐの用意周到なり。停車場には、午前六時頃より来集せる僧侶信徒雲の如く、遠くは九州、北陸、四国、近くは岐阜、愛知より旗を推立て列を作り、数万人の多きに至り、七十余名の警官は雑沓を制しつつ、警戒したり。斯くて仏骨は汽車に奉ぜられて、午前九時七条に着するや数発の烟火晴空に轟き渡り、暹羅公使、本派本願寺法主代理近松尊定、誠照寺派管長二条秀源、妙法院門跡村田寂順、楠地方裁判所長、警部長、参事官其他、僧俗併せて一千余名プラットホームに迎拜し、かくて妙心寺花園教会と白色に染抜きたる紫縮緬の旗に、村田奉迎総理を先頭として、唐櫃の仏骨は、土屋観山、後藤禅定二師に恭しく担ひ出され、大谷正使以下随行し、大谷派本願寺に向ふ沿道の善男善女、一斉に念仏唱名、随喜

の涙を流したり。やがて本願寺着。大門より阿弥陀堂に入り、堂側に光瑩法主各連枝以下敬迎へ、伶人五十人奏楽の中に、緞子幕引廻らしたる大師堂の upper 段に安置せられたり。法主初め各管長、其他僧俗拝礼焼香し、一同休憩所に昼飯を喫し、やがて十二時過夫の玉輦に仏骨を移安し一同拝礼、予定の如く妙法院に向ひたり。

葉書だより〔明治33年7月22日 第六六三二号〕

● 仏骨迎齋の盛なるに就て、厭仏生、精神宗教家の説は大間違。却て自分の馬鹿を知らして居る。あれは仏骨ばかりで騒いだので無い。大谷正使が体躯不自由にて我国宗教の為に遠く暹羅に航したる労を多とし、無事帰朝を祝するのが直接間接に仏骨奉迎を盛ならしめたる大原因である。(真心仏教家) ● 仏骨来る迎ふべし。仏教信ずべし。(河南大道師、有難屋、十目生) ● 仏骨安置は、天王寺の伽藍を拡張して、大阪に致し度し。(旭生) ● 仏骨とやらを千日前に見せ物とし、僧侶の木戸番をさせ、上り高を軍事費に寄附したら国の為に成る。(天満念仏) ● 厭仏生は狂に非れば、愚者中の愚なり。積尊の骨渡来するも、君の如き憫然なるものを救ふ為なり。(信仏生) ● 仏骨奉迎の盛なるを見て、何故世間に馬鹿者多きを知りたるや聞たし。(仏信生) ● 僧侶信徒の仏骨を歓迎するは、世間事業家の広告看板と同じ。(崇骨生) ● 當世の人は理に偏して情感を忘却せり。宗教は理をのみ以て左右すべからず。仏を誹謗するは自己の浅見を表するのみ。(禾重)

●現今の社会は活ける釈迦を渴仰せり。彼の枯骨何の要かある。
仏教の衰滅近きに在り。(罵倒禪師)

「大阪毎日新聞」

仏骨奉迎使の帰着 (明治33年7月16日 第六〇〇七号)

去十一日午前九時、奉迎使長崎に到着するや出迎人一同大波止に集ひ、奉迎事務所にては、予ねて用意したるスチームボートを出し、一隻は奉迎事務所員の乗用に充て、一隻は各宗管長代理及び新聞記者の乗用に充て、相前後して本船ロヒラ号に着し、先奉迎使一行の労を謝し、間もなく仏骨をスチームボートに移し、正副使奉迎事務員等之を保護し、他は用意のボートに分乗して上陸せり。其間海上にて断えず煙花を打揚げ、皓台寺に至る沿道は人の山を築ぎ、各戸国旗を掲げ迎意を表し、頗る雑沓を極めたり。仏骨は奉迎委員四名にて之を昇ぎ、正副使は車にて之に次ぎ、其他各宗奉迎員重なる講中等之に従ひて皓台寺に入り。一行暫時休憩の上、仏骨を本堂の正面に安置し、正使大谷光演師一行を代表して、仏骨を暹羅国王陛下より拝戴し帰朝したる旨を述べ、夫より各宗僧侶読経法要を執行し了りて、一行は旅館迎陽亭に入れり。當日は雨天にも拘らず、法要に参せんと集ひ来る善男善女は、無慮一万余人、流石に広き本堂も立錐の地なきに至り、実に近來稀なる盛況なりき。却説奉迎使一行の暹羅国王陛下に謁せしは六月十四日にして、當日は宮内省より美麗なる二頭曳の馬車を差立てられ、宮内大臣の先導にて謁見所に入り、文部大臣は奉迎使を国王に紹介し、国王陛下より左の勅語ありたり。

仏世尊の神聖なる遺形の一分を受取らんがために、始めて此国に来れる日本仏教徒の奉迎使を見るは、朕の喜ぶ所なり。且日本は遠隔の国にして、制度習慣等或る場合に於て異同なきに非ざれども、尚同一宗教を信ずる所の国なるを信認することに於て満足の情にたへず。朕が仏教の先導者にして保護者なるを承認せられし上は、奉迎使へ神聖なる遺形を分配すべき幸福なる義務を尽すことは、最も喜ぶ所なり。従前日本仏教徒が、此神聖にして真実なる遺形の分配を得ざりしことは、彼等が熱誠なる希望を朕の識認せざりしが為なり。今や此貴重なる宝物の一分を得て日本へ安置し、巡拝者をして其便を得せしめんとする彼等の願を信認せし上は、之を附与することは、朕が最も喜ぶ所なり。奉迎使の此国に來り、且普通協同の利益のために日本仏教徒が海外仏教徒を熟知し、一層交際を親密にしたる後は、日本仏教の益隆盛に赴くことは、朕の最も切望する所なり。次て大谷光演師の答辞ありたりと。

岩本千綱氏と本願寺〔明治33年7月16日 第六〇〇七号〕

仏骨奉迎につき、暹羅国において稲垣公使と共に種々斡旋せし岩本千綱氏は、正使に随ひ帰朝し長崎へ上陸し、正使等に先ち一昨十四日京都に來り。午後同寺黒書院にて法主に面会せしが、大谷派本山にては、同日午後七時より同氏を祇園中村樓に招き、仏骨奉迎の顛末概況を聴き、本山役員その他二十余名列席して、晚餐を饗応したり。

仏骨奉迎使一行〔明治33年7月17日 第六〇〇八号〕

仏骨奉迎正使大谷光演、副使前田誠節氏等の一行は、昨日午後四時五十分神戸着の山陽列車にて広島より神戸に着し、京都より出迎へたる奉迎事務所常任委員土屋觀山、相沢香庵、その他各宗各派より出迎へたる僧侶及び信者の出迎を受けて下車し、前田副使は、長さ二尺幅一尺五分許の箱に納め、緋緞子を以て包みたる御遺形を奉じて、大谷正使と共に上等待合室にて暫時休憩の後、県庁の馬車にて旅館諏訪山中常磐に入りたるが、停車場前及び多聞通其他西辻へは、僧侶信者無慮一万人出迎へたり。一行は同夜一泊、本日午前十一時卅五分神戸駅発當地に向ふよし。

暹羅国公使〔明治33年7月17日 第六〇〇八号〕

本邦駐劄暹羅公使は、仏骨奉迎のため昨夜入洛。東本願寺より差廻したる馬車にて旅館京都ホテルに入りたりと。

尾張大谷派寺院の仏骨奉迎準備〔明治33年7月17日 第六〇〇八号〕

既報の如く仏骨奉迎に関する尾張大谷派の寺院は、数日前京都に赴き、同市烏丸通りに出張所を設け、専らその準備中なるが、同派宗徒五百余名は、愈明十八日打揃ひ京都に赴く筈にて、関西鐵道にては特に是等奉迎者に対し、汽車賃の割引をなす筈なりと。

南条博士の暹羅談〔明治33年7月18日 第六〇〇九号〕

仏骨奉迎正使大谷光演師に随ひ、暹羅へ渡航せる文学博士南条文雄氏、神戸において往訪の社員に語りて曰く、仏教の暹羅に入りしことについては、磐谷に滞在中種々取調べしも、何分正確なる歴史なきことゆゑ、その年代は詳かならぬも、釈迦如来歿後弟子の一人、同国に來りて布教したりとのことなるべし。其勢力は偉大にして、歴代の国王は何れも仏教に帰依し、仏門に入らざるもの少なし。特に現国王より三代前の国王は、二十歳にして出家し、廿七年間緇衣を纏ひ、その後王位に即き、仏教のため大に力を尽しければ、仏教ますます興隆し、中流以上の貴族は必ず一度仏門に入るの例となり、而して實際仏門に入らねば、政治その他の社会に対するも勢力なきものとなれり。されば磐谷市中の寺院は頗る莊嚴にして、特に宮裡にある寺院の如きは頗る華美を極め、安置せる仏像は寶石を以て作り、装置せる作花は同国北部の殖民地より毎年献納するものにして、金銀を以て作られたるものなり。其他諸種の裝飾品もまた皆珍奇ならざるはなく、かくて同国の珍宝美術品は、悉く王室及び同寺院に吸集せらるるといふも、敢て過言にあらざるべし。又同国の仏書は、皆印度のパアリ語を以て記され、僧侶の一般布教に従事する場合は、之を暹羅語に訳して説く者の如し。扱仏骨の暹羅に伝はりし次第は、印度のバステイ州に於て去明治卅年、英人ウイリアム、ペツペ、ジョーヂ、ペツペといへる兄弟が発見して、発掘に着手し一時中止せしを、英人スミスの奨励により再び着手し、遂に一の瓶を発掘し、其蓋

各地の新聞よりみた長崎から京都までの仏骨奉迎

に記せる文字に就て釈迦如来の遺骨なることを知り、英国政府へ届出しかば、同政府は之を暹羅国王に送りて、其内上ビルマ、下ビルマに各一片、及びインドセイロン島に三片を配たれんことを依頼したるより、同国王は本年一月盛式を以て之を各国の奉迎使に渡し、稲垣公使等の尽力により、好意上その一片をまた我国へ配たるゝに至りたるものなり。従来同国に行はるゝ仏教は、所謂小乗教なるが、僧侶の生活は善く、積尊の教を守りて規律嚴肅なり。王族といへども毎朝必ず跣足にて市中を托鉢し、信徒は道路に跪坐して之に米、或は錢を喜捨すれば、僧侶は恰も仏の代身といふ姿にて之を受け、会釈もなさず無言にて行過ぎ、その見識こそ却て日本僧侶等の想像し及ばざるところなり。又食事は二食にして不可昼食と唱へ、正午迄に二回の食事をなし、午後より翌朝迄は一切食事をなさざるなり。又同国には耶蘇教、バラモン教、マホメット教なども侵入しをるも、その勢力微弱にして下等社会及び移住民の間に行はるゝのみ。マホメット教は、主としてマレー人の間に行はるゝものゝ如く、詮ずるに同国教育の権は、今尚仏教徒の手にありて、中流以上のものにて外教に帰依するもの少きが如し云々。

暹羅公使〔明治33年7月18日 第六〇〇九号〕

本邦駐劄暹羅公使バージロング、ロナチエス氏は、昨日京都ホテルを出で、通訳官を随へ大谷派本願寺に至り、寺務所役員の場合にて大師御影兩堂に参拝し、ソレより大寝殿に於て法主大谷光瑩

師と面話し、茶菓の饗応を受けたる上退出し、同十時五分七条発汽車にて當地に來り、仏骨奉迎の列に加はりしこと別項記載の如し。尚公使は本日京都に引返し、明十九日午前七条停車場に於て、再び仏骨を奉迎する筈なり。

仏骨の到着〔明治33年7月18日 第六〇〇九号〕

一昨夕神戸に着し、諏訪山中常磐に投じたる仏骨奉迎正使大谷光演、同副使前田誠節氏等の一行は、同夜、床次兵庫県書記官その他各宗派より出迎へたる僧侶の訪問を受け、昨朝は午前八時より九時迄の間、各宗各派の重立ちたる僧侶及び信徒に面接し、同十時数発の煙花を合図に旅館を出門し、遺骨を納めたる唐櫃の法興は、土屋觀山、有沢香庵の両師これを舁ぎ、大谷正使、前田副使の両氏は、兵庫県庁の馬車に、其他の一行は人力車にて、数十名の僧侶に擁せられて神戸停車場に着せり。此処には数千の僧侶、信徒十数旒の小旗を押立て奉迎し居たるが、一行の法輿を擁して同停車場の上等待合室に入るや、停車場内に充満せる信徒は、一斉に南無阿弥陀仏を唱へつゝ、待合室に闖入せんとするを、出張の警官数名辛うじてこれを制止したり。斯くて一行は小憩の上、同十一時三十分同駅発の汽車にて神戸を發し、當地に來れり。神戸駅のプラットホームには見送人山の如し。又神戸駅より三宮駅に至る沿道にも、無数の信徒整列して見送れり。微雨の如き聊も頓着の模様なかりき。斯くて梅田に着せしは午後零時卅分なりしが、是より先き各宗僧侶、各講中等は雲霞のごとく、また波濤の

ごとく同駅附近に押寄せ、さながら人の山を築き、仏骨奉迎若くは何々講など書したる青白紅紫の旗は、風に靡きてその数なかなかに算すべからず。北側プラットホームには、両本願寺の役僧をはじめ奉迎世話掛のもの等、羽織袴若くはフロックコートにて控へ、曾根崎警察署詰の巡查は、署長指揮の下に場の内外を警戒せり。やがて汽車の着するや（この時数個の煙花を打揚ぐ）赤地金襴もて包まれたる箱は、二人の僧侶の肩によりて□等車室を出づ。是れぞ仏骨なりとは知られたり。奉迎正使東本願寺新法主大谷光演師、同臨濟宗妙心寺派前田誠節、同曹洞宗派日置黙仙の諸師これに従ひ、西手の三等待合室に遺骨を持ち込みかねて、天王寺より差廻しある輿の内に入れ、少時休憩の上場外に出で、各宗僧侶、各団体、各講中および無数の善男善女の歡迎を受く。ワザ／＼東京より來り会したる暹羅公使もその内にあり。茲にて行列を整へ、予定の順路をシヅ／＼四天王寺へと練りゆけり。行列の順序は、真先は六紺色旗、次に各宗派講中、法服着用の宗学生、真言律宗、華嚴宗、法相宗、黄檗宗、融通念仏宗、時宗、日蓮宗、本願寺派、臨濟宗、曹洞宗等の僧侶にして、暹羅公使は遙に仏骨輿の先にあり。次に無数の旗翻り、仏旗につゞいて輿は六人の白丁に舁がれ、正使および副使等いづれも馬車にてこれに従ひ、随喜連その後に続きたれば、延長数町に亘り道の両側には、歡迎人と見物人とをこき交せて堵のごとく、輿のその前を過るとき南無阿弥陀仏の声いづくよりともなく起れり。斯のごとくにし、仏骨の四天王寺西大門前に着せしは同三時二十分の頃にし

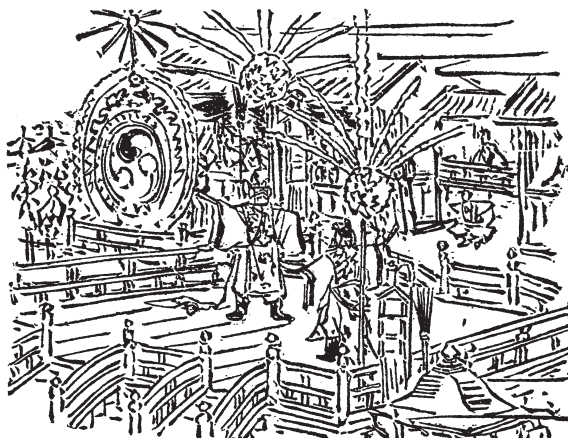
て、煙花再び中空に轟くを合図に、聖徳太子御自作の木像は、菊花の紋章打ちたる法輿に移され、吉田同寺住職のお供にて華表近く出迎へ、仏骨の輿はこれに導かれ（此昨令人筆筆および横笛、大太鼓の吹奏を始め）徐に西大門より進み入り、西重門を経て金堂前にて小休、二王門を南へ出で虎の門に入り、太子殿の前にて仏骨の太子に対する挨拶の法あり。太子の木像は茲に別れて太子殿に入り、それより仏骨輿は再び動きて猫の門を北へ出で、二重門を通り抜け舞樂堂上を通過して（舞樂堂に優曇華に形どりたる四花といへる飾り付けあり）六時堂に入り、程よき場所に安置せられたる後、吉田大僧正は衆僧を率ゐて一遍の読経をなし終て、大谷光演師は奉迎正使の資格をもつて参列の各宗僧侶に向ひ、暹羅国王陛下の好意によりて有がたき仏骨を得たること、海陸恙なく安着せしは、全く仏の威徳なるべきこと、各員の斡旋謝するに余りあり、云々の意味の挨拶あり。之にて當日の式を終りたるが、仏骨の同寺に着し式を終るまでの雑沓は、実に筆紙に尽しがたく幾万とも知れぬ随喜連は、同寺の門外に充滿し、仏骨輿の動くについて動くさま宛然万頃の波濤のごとく、一時は死傷もやと危みしが、警官の取締行届きて左ることなかりしは幸なりき。

釈尊遺骨拝迎会（明治33年7月19日 第六〇一〇号）

既記の如く一昨日四天王寺迄奉迎せし仏骨は、同日より本日迄同寺の六時堂内正面に安置せるが、右につき昨日は午前九時より午

各地の新聞よりみた長崎から京都までの仏骨奉迎

後四時迄同堂に於て拝迎会を行ひ、各宗管長を始め、各派僧侶其他参拝の信徒等の焼香あり。堂前なる舞台には種々飾付を為して、同時間内に舞樂振鈴、万歳樂、延喜樂、安摩、八仙、太平樂、胡德樂、陵王、納曾利等あり。暹羅公使フイヤ、クツデイロング、ロナチエツド氏を始め、菊池府知事、吉見警部長、警官及、大谷光演師其他名譽職、新聞記者等臨席し、来賓には夫々設けの別席に於て茶菓を饗し、同山内なる五智光院に於て、午前は奉迎使一行中の前田誠節氏、午後は南条文雄氏が今回奉迎に関する演説ありたり。尚各宗派僧侶の集合は、前日と同様夥敷事に於て、一般の参拝者も天気あしきに拘はらず、遠近より集り来る老

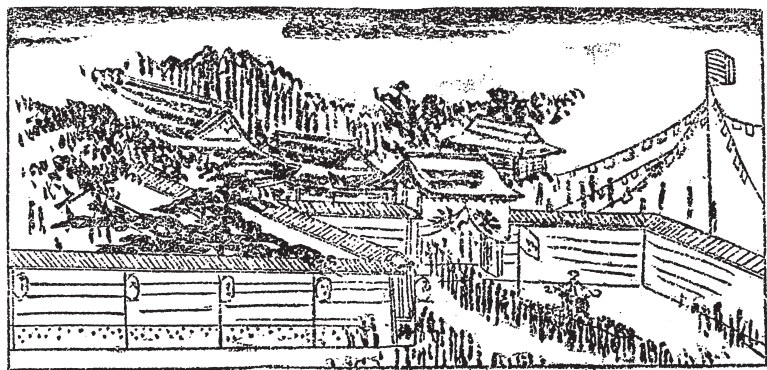


若男女陸続として、六時堂の周囲は人の山を築きたり。天王寺署よりは、前日と同じく署長以下各警部巡查総出にて同寺の内外を取締り警戒を加へ居たるが、六時堂の西手入口などは、宛ら停車場にて切符を買ふ如く、何百人となく長く続きて順を立て居り。其他寺内には氷水を始め種々

の出店あり、近頃に無き賑はひなりき。又仏骨は弥々本日午前六時三十分、天王寺駅発の汽車にて京都へ奉送する筈。

京都の仏骨奉迎〔明治33年7月20日 第六〇二一号〕

京都にては昨日仏骨奉迎の當日にて、朝来曇天ながら西方の軟風いとしめやかに、塵も揚らぬ天気なりければ、仏骨の七条駅に着するを拝まんと、市中の善男善女早朝より打連れて同駅に向ひたるが、東本願寺前より七条停車場附近は、午前八時頃には人を以て埋れ、塩小路警察署よりは、徳岡署長を始め警部巡查一同総出にて警戒取締りをなしたり。七条駅へは暹羅公使バージロング、ロナチエス氏、楠京都地方裁判所長、同夫人、井上警部長、宇佐美参事官、仏骨奉迎事務総理村田寂順師を始め各宗管長、奉迎担任委員、各宗派奉迎委員等先着し、停車場楼上に休憩して列車の着するを待てり。午前八時卅分より停車場南手の畑中にては、大谷派三河国信徒より寄附の煙花百発を打ち上げたり。かくて仏骨及び奉迎正使一行を乗せたる列車は、午前八時五十分七条駅に着せり。プラットホームには暹羅公使をはじめ楠裁判所長同夫人、井上警部長、宇佐美参事官、村田奉迎事務総理各宗管長、奉迎委員、各宗派僧侶、信徒、学校生徒等無慮千余名整列して奉迎し、正使大谷光演、副使前田誠節、同日置黙仙の三師以下随行員一同下車し、仏骨の赤地金襴の蓋をなせる唐櫃に納めあるを車中より卸し、真先に奉迎と記せる紫の旗二旒を押立て、常任委員名和海師先導して村田総理先列し、次に仏骨を納めたる唐櫃を常任委



仏骨妙法院の着景 (看参外口)

員土屋観山、後藤禅提の二師にて昇き、大谷正使、前田、日置両副使及び暹羅公使、各宗管長僧侶信徒等にて順次に随行し、信徒諸講中は紫、赤、白等の各旗数十旒を列の前後に押立て、いづれも徒歩にて停車場を出で、烏丸通を北へ進行せり。烏丸通にては道の両側に青竹の柵を設け、各戸奉迎の二字を染め抜きたる紅提灯を吊し、各旅舎は諸講中其他各教会及び各宗出張等の奉迎事務所を設けあること、て何れも幔幕を張りたるが、其時行列先払は妙心寺の旗を押立てたる講中なりき。仏骨の北浜銀行支店前に到るや、幾万とも限なき奉迎人等一時に南無阿弥陀仏を唱し、珠数をつまぐる音一種の好響を起したりき。さて又市中各町の寺々にては、仏骨の七条停車場へ着する

を合図に、洛東大仏殿の鐘を天台宗の阪本良順師が、得意の妙技もて打鳴らしたるより、各寺も相応じて打鳴らし始めたるを以て、東山に反響して到る処殷々の声轟するばかり。かくて行列は次第に進行して大谷派本願寺に向ひ、九時三十分大谷派本願寺門より入る。本堂階下には衆僧整列し迎儀楽を奏し、法主大谷光瑩氏及び連枝は同処に奉迎し、唐櫃は本堂階段を昇ぎ昇り内陣に入堂し、それより高廻廊を経て大師堂に入り、大谷正使、唐櫃より赤地金欄にて作れる高さ一尺幅八寸許の袋に入れある仏骨を出し、内陣本尊前に設けたる八脚台に打敷を掛け、其上に置きある総金塗経机の上に安置せしが、間もなく暹羅公使、各宗派門跡管長、奉迎総理高等官以下、各宗派奉迎者、一宗派づゝ順次拝礼焼

香。同寺内の休憩所に入り、當時韓国前軍部大臣趙義測氏も、大阪源正寺住職祖父江聖善師の案内にて来式参拝ありき。而して本願寺門前には、同寺徽章の大旗数十旗を立て、之に六金色の小旗を蛸釣り、また本堂門前、大師堂門前には、紫の幔幕を打つて国旗を交叉し、尚幡幡教旒を境の内外に立て、且両堂共繞らすに五色の幔幕を以てし、僧侶一般の昇堂を差止めたるなど、厳めしとも又美はしかりき。やがて午後一時、宝興の東本願寺を出で、肅々として妙法院の仮奉安所に至るや、その道筋延長十八町七間には、高さ五間の屋形を造り、天井に白金巾を張り詰めて日蓋ひとなし、恰も隧道の如く。沿道各戸は幕を張り、六金色の仏旗を掲げ、両側には竹にて埒を設け、殊に東本願寺附近は奉迎と記せる紅灯を各戸に掲げ、殊に珠数屋町など六条地内一面は、御法の

道の返り咲きし心地にや、各戸厳めしく幔幕を張り、仏旗も昔物を用ひたるなど、流石は維新前仏教盛時の時代をも思ひ出でられてをか。今その行列の順序を掲ぐれば左の如し。

○先口 ○六金色旗 ○空也堂 ○各宗派講中 ○各団体
 ○金閣不動講社員 ○明暗教會員 ○真言律宗 ○華嚴宗 ○法相宗
 ○融通念仏宗 ○時宗 ○日蓮宗 ○三門徒派 ○誠照寺派
 ○山元派 ○出雲路派 ○木辺派 ○興正派 ○仏光寺派
 ○高田派 ○大谷派 ○本願寺派 ○曹洞宗 ○黄檗宗 ○永源寺派
 ○円覚寺派 ○大徳寺派 ○東福寺派 ○建長寺派 ○妙心寺派
 ○南禅寺派 ○建仁寺派 ○相国寺派 ○天竜寺派 ○西山派
 ○真言宗 ○真盛派 ○寺門派 ○天台宗 ○六金色旗
 ○天童子 ○各宗管長方 ○奉迎事務総理 ○暹羅公使 ○衆師
 ○仏旗 旗幟 (宝) 幡旗 ○奉迎旗 ○奉迎正使 ○奉迎旗
 ○奉迎使 ○奉迎使隨行 ○各宗門跡 ○各宗本山住職
 ○各宗派重役 ○各宗派僧侶 ○各団体總代 ○各宗派講中

因に當日諸国より仏骨奉迎のため京都に集り来りし各宗派の僧侶、及び老若男女の信徒は、無慮三万以上にして、東本願寺附近の各旅人宿は何れも客室充滿し、七条二条の両停車場着の汽車さして伏見帰りの電車は、奉迎者を以て充たされたりき。また當日奉迎行列の僧侶中において最も目立ちしは、花園教会の各員等が何れも赤地錦の袈裟揃にて、各宗特志の信徒は、善男善女何れも胸間に奉迎の徽章を佩用して、さも得意氣に列の内外を徘徊し、取締役とも見ゆる諸講中の老人株は、新調の羽織袴にて奔走し、

各地の新聞よりみた長崎から京都までの仏骨奉迎

本願寺乗用の人力車は、本願寺の徽章の旗を翻して、市中各処を急がし気に乗り廻したりき。

仏骨京都着余聞 昨日の京都は、午後に至りて人出一層甚しく、七条二条の両停車場は、汽車着する毎に降客殆んど五千余人、近頃稀有のことにて、畿内近傍の諸国は勿論、西は九州、山陰、山陽、四国及び仏教流行の北陸地方、その他東海の諸国を始めとし、遠き北海道より後馳せに来るも多く、警察の統計によるも其詳細は不明なるも、昨日京都にありし僧侶の数は、総じて一万二千以上なりしなるべく、参列のため来りし諸国の諸講中は、三万余人、行列拝観のため路傍にありしものは、二十三万五千と註せられたり。▲昨日午前六時より東本願寺境内に設けたる天幕毎に、南条文雄、村上專精、堀憲一その他の諸師百余名の仏骨歓迎演説あり。同会は三十六時間継続開会する筈なれば、閉会は本日午後六時なり。▲本日より三日間、妙法院において各宗交番にて仮奉安会を開くよし。▲大谷派本願寺新法主は、仏骨奉迎正使を全うせるを以て、本日停車場午前九時、大谷派本願寺の大師堂において親授をなすよし。▲當日臨時病傷者看護のため、六条生命保険会社事務所より、金田医師外五名、看護婦十二名を引率し出張したるが、拝観人中卒倒者二十四名、腹痛その他急病五名を治療せり。▲さて又當日、殊に凡俗の眼につきたるは、行列中祇園、先斗町その他各遊廓より出したる五十余名の天女、仲居等に護擁せられて練りゆく状なりき。

釈尊遺骨の出発〔明治33年7月20日 第六〇二一号〕

予記の如く釈尊遺骨は、昨日午前五時三十分、四天王寺六時堂に於て鳳輿に移し、奉迎使大谷光演師以下諸員随従し、各宗管長、僧侶信徒等奉送し、同六時、四天王寺西門を出で南へ、関西鉄道天王寺駅へ着、同三十分発の城東線列車にて梅田駅へ着、それより官線に乗り替へ、同七時三十六分発を以て京都へ向へり。されば天王寺内をはじめ其道筋は、未明より拝観人山をなせり。天王寺署にては前日に引続き警戒を加へ、梅田駅にても早朝より拝観者多く、遺骨着発の際はプラットホームに入らんとして入場切符を買ふ者多かりしが、同駅にては雑沓を防ぐ為め、入場切符は七十枚計り出し謝絶したりしかば、信者は堪へ難く七銭を投じて吹田行き切符を買ひ、僅に拝観の願望を遂げたるなど、中々の雑沓なりき。発車の際は煙火を打揚げ、曾根崎署にては非常を戒めたり。

仏骨の妙法院着〔明治33年7月20日欄外記事 第六〇二一号〕

東本願寺にては、昨日午前十一時に礼拝を停止し、大師堂内陣に於て赤地金襴の袋に収めたる仏骨を、今回新調したる輿に移し、正午より□□大谷派本願寺内に休憩□□宗派管長を□□□□□□□□□□□□□□□□願寺、看護婦、諸国仏教各団体、花車、各宗派僧侶、学生、六金色旗二旒、各宗管長、奏楽僧侶、仏骨奉迎事務総理村田寂順師、仏旗、(金襴にて造り仏の一字を生糸にて縫出せしもの) 仏具、(□は四方の□□を□□

て、幸ひのことなれば両三日滞京なし。嵐山其他の勝を探りては如何と勸むる者あれど公使は頭を掉り、閑遊なれば他日に期すべし、豈に積尊遺形奉迎の際かゝる一身の安を貪るべけんやと斥けたりき。兎も角仏教国たる日本にして、仏骨を奉迎安置する固よりあしき事にあらず。殊に暹羅国上下一般に我日本国を敬慕し、万事之に兄事せんと明言せる今日、この奉迎の一事は一層其親交を増し、延ては東方の大局より打算しまた多少の得る処なしとせんや。

元来暹羅は弱国なりと雖も、其国の富裕なるは印度等に比肩し、又都會の人民は□弱輕薄なりと雖も、地方の人民は朴実忠直にして、以て物産を増殖せしむべく、また収めて兵となすべし。若し我国にして指導の便に當り、政治、法律、諸般の學術に通ずる者を遣はし漸次之を日本化せば、我国が世界に雄飛するに際し一方の「捨石」となす豈に太だ難からんや。而も日本化を試るむに際し必要の条件は先づ之を仏教なる「管」より通するにあり。即ち我国有志の僧侶の進んで布教感化を行ふにあり。これ彼国にては仏教即ち僧侶は無限の勢力あればなり。

余は去る二十五年暹羅に航してより、本国と往復する前後十回に及び、彼土の形勢事情はまづ熟知し居る積りにて、聊か抱懐する所なきに非ず。近日暹羅通商史なる一書を撰して世に問ひ、且つ別に南亜宣教会なるものを組織し、我國の孤兒男五十名、女二十名を彼国に遣はし、男兒は僧侶、または通弁の任に當らしめ、女兒は彼土有力者との結婚、下つては雜貨店の売子にあてんとす。

其故さらに孤兒を用ゆるは彼をして望郷の念を絶たしめ、其永住を期図せんが為なり、云々。

仏舍利奉迎彙報 (明治33年7月19日 第四七五二一號)

着京及焼香 仏舍利は弥よ今十九日午前六時三十分、天王寺停車場より乗込み、同七時四分梅田駅着、同七時三十一分官線鉄道に乗替、同八時五十分京都停車場に着、同場より辛櫃に移し、八瀬昇良是れを昇ぎて、奉迎使随行し烏丸を北へ、直ちに大谷派本願寺阿弥陀堂門より入り、階段中央より昇進し内陣に入堂、此時内陣の金障子を閉つ。夫より後、扉前を経て廻廊より大師堂内陣に移し、予て設けたる蓮台に安置し、九時三十分より順次焼香を始む。此第一は暹羅國公使にして、各高等官、各門跡、各管長以下順次焼香を了るは十一時頃なるべし。

道筋とテント 道筋は大師堂門を出で、烏丸を北へ五条を東へ、伏見街道を南へ七条を東へ、智積院前を北へ妙法院勅使門より入る。此延長十八町七間の道路は、高さ五間の屋形を設け、之に天竺木綿を張り掛け屋根す。

宝輿安置 焼香終りて仏舍利を宝輿に移して内陣に安置し、午後零時三十分供奉参列を両堂前に調べ、午後一時大師堂門より繰り出す。

両堂門開閉 両堂門は午前九時十分、唐櫃の阿弥陀門を入ると共に閉鎖し、雑沓を防ぐ。

両堂裝飾 阿弥陀堂、大師堂及び廻廊には、五色幔幕を繞ら

し、堂内には更らに裝飾を設けざるが、両門内には幟幡を十基づゝ樹立し、本堂門内大蓮華水鉢の噴水は常日より陪増す。

新門主の親論 正使たる大谷派新門主は、仏舍利奉迎の任を全ふしたるに付、明二十日午前九時、大師堂に於て親論を為すと云ふ。

三十六時間の大演説会 大谷派真宗布教会の發起にて、烏丸七条下の本山工作所にて、今十九日午前六時より明廿日午後六時まで、三十六時間昼夜間断なく大演説会を開く。出席弁士は六十名にて、其重なるは南条文雄、村上専精、岩本千綱、清沢満之、石川馨の諸氏なり。

録事不潜越 前報、野間凌空師が暹羅公使と同車せし件に付、岩本千綱氏より、當日岩本氏は名古屋迄、野間氏は大垣まで各公使を出迎へ、停車場にて大谷家より差廻の馬車に乗る節も、野間師は固く同乗を辞退せしも、兼て公使との面識の問柄にもあり且つ途中話をも聞く事ありとて強て同車を勧められ、氏小生と共に陪乗せしものなりと申越ありたり。

行列写真 行列は一切写真せしめざる約束なりしも、玄鹿館鹿島清兵衛は、先年大喪行列の写真を許可せられし由緒を以て、特に本願寺妙法院両門前に於て写真する事を村田総理より許可せられたり。

天童は列外 参列中に天童ありしが、追々信徒申込多く五十名に及びしよしにて、之れは更めて列外とし、十分間計り先発するよし、

天童芸妓 祇園町甲部の芸舞妓五十名も、本日の天童行列に加はるべしと。

天王寺法要 昨十八日午前九時、天王寺に於て拝迎会執行。大谷正使、暹羅公使、菊池知事、吉見警部長、田村市長、市名譽職等順次焼香あり。又舞台には同時より舞楽（振鉦、万歳楽、延喜楽、安摩、八仙太平楽、胡德楽、陵王、納曾利）ありたり。當日降雨にも拘はらず、境内は非常に混雑なりし。

莊嚴なる仏舍利奉迎式（明治33年7月20日 第四七五二号）

世界の大聖釈尊の遺骨東来して、東方の仏教に一道の活力を与へ、其信徒等の随喜渴仰いふばかりなく、予記の如く昨日を以て莊嚴なる奉迎式を挙行しぬ。今順次に其光景を叙せん、

京都停車場の光景

京都停車場にては、予定の時尅に先立ち、奉迎の僧俗男女幾万人となく群集なし、停車場より東本願寺附近に至るまでは、両側とも人もて墻壁を築きし如く、或は紅或は白または紫、其他いろいろの講社旗は、花紅葉の如く飄々として二三丁に飄り、中間の通行路には、一定の徽章を着たる僧侶の紅紫黒種々の法衣に、金欄等の袈裟をかけ、五々三々急がはしげにまたは得意気に、停車場指して趣く者ひきも切らず。白衣の巡査は声を枯らして雑沓を制し居れり。

時は次第に近づきぬ。百八の烟火は爆然として中天に飄かへりぬ。紅衣黒衣の僧侶の歩み一層急がはしく、二頭立の馬車は一二

駿馬に白泡を嘯ませて、停車場に着きぬ。かくて続々としてプラツトホームに入り出迎へしは、奉迎事務総理村田妙法院門跡、本派本願寺法主代理連枝近松尊定、天台座主中山玄航、真言宗長者原心猛、天台五箇門室の門跡、暹羅公使諸師、其他各宗派管長、奉迎委員、大谷派大学寮生徒等千二百余名にして、いづれも静粛に汽車の近づくを待ちぬ。此間烟火はますく飄がへり四辺はいとゞ動揺めき渡りぬ。

仏舍利到着

午前九時十分（二十分延着）に至り、仏舍利を載たる汽車は徐々として七条停車場プラツトホームに着するや、両側に整列して奉迎せし僧侶はどつと一度に動揺めきしが、正使大谷光演師以下いづれも旅装のやつくしきまゝにて下車し、仏舍利を納めたる小唐櫃は赤地の大和錦にて蔽ひ、奉迎委員中大谷派土屋観山、妙心寺派後藤禅提の二師之を昇ぎ、先導は本派名和洵海師、左右に附添は天台宗蘭光轍、日蓮宗豊田日貫の二師にて、次に正大谷光演師、次に奉迎使前田誠節、同日置嘿仙二師、並に正使の随行長南条博士以下数名随従し、停車場構内を出れば、それぞれ仏舍利よ積尊よと幾万の群集は一度に動揺きたち、□□などは南無阿弥陀仏くくと唱ふる者多く、かゝる中を一行は徒歩なし奉迎、各講社等は雲の如く随行なし、烏丸を北へ徐々として東本願寺阿弥陀堂門より入りしが、遠く見れば各講社の旗は揺々として、彩鮮目を射頗る美観を添へたり。

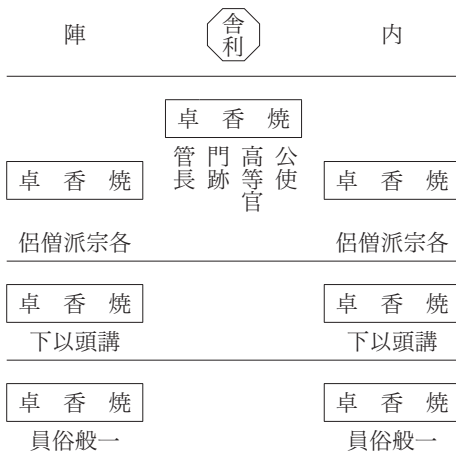
東本願寺の準備

同寺にては前日より準備怠りなく、門内より阿弥陀、

入門 礼拝

かくて小唐櫃の阿弥陀堂門に入るや、執綱大谷勝尊師先導し、阿弥陀堂正面階下に至り、法主及び連枝奉迎し、堂衆階下に於て唐櫃を受取り、昇ぎて昇堂するや法主先導なし、内陣に設けたる錦茵の上に奉安し、一仝左右に分列躊躇し、夫より法主並に奉迎正使内陣に入り、次に連枝入堂し、各門跡、各宗派管長、以下奉迎者昇堂外陣に仮坐し、奉拝し終て折障子を閉づ。夫より唐櫃は阿弥陀堂後門より後堂を経て、大師堂の内陣に設けし錦茵上に奉安し、此処にて管務小林□□師、法主、及び奉迎正使、連枝、式事係にて仏舍利を納めたる金函を唐櫃より出して、内陣中央の華籠棚の上、総金経卓の上に奉安し、右一仝拝礼し終て退出ありしは十時三十分にして、

此時内陣の金障子を
開く。
夫より仝堂外陣に於
て、暹羅国公使並に
高等官、各門跡以下
の焼香ありしは左図
の如し。
右にて管長以下、阿
弥陀堂より廊下を経
て大師堂内陣際にて



拜礼焼香。次て各宗派僧俗一宗派づ、交々前路を経て、大師堂外陣にて拜礼焼香あり。終て十一時三十分折障子を悉く閉ぢ参詣を停止し、夫より両法主裏方の拜礼畢り、内陣正面地布敷に宝輿を据置き、仏舍利を宝輿に移し、折障子を開き、正午両門を閉ぢ、両堂前に於て列を整ふ。

出門と行列

仏舍利を移したる宝輿は、内陣に奉安して、法主並に奉迎正使等守護し、一仝休憩せしが、午後一時を報ずるや大師堂の広庭に列立せる供奉参列員は、大谷派本山を始め諸講中は、何国何組何々講と染抜たる白赤浅黄紫其他種々の幟旗を押立て、一講一組には取締りありて、それく進退を指揮せり。かくて最先には列外として天童五十名いづれも十歳より十五六歳までにして、頭に金の冠をいただき紅衣に白丁被け、下には紫の指貫を穿ち、手には蓮菊すゞきの造花を持ち、麻裏にて静々と歩める。後よりは附添の女中小朱傘を指かけたるが、其艶麗なる譬へんに物なし。次に本列となりて、六金色の仏旗飄がへりつ。次に空也堂の一行は鉦を叩いて進行し、次に各講中各団体長々と続き、次に金閣不動講員は螺貝を吹たて、次に明暗教会は例の天蓋を被り尺八を吹奏して進み、次にいろくの時花を挿したる花籠三台徐ろに隣り、次に各宗学生、次に真言律宗、次に華嚴宗、次に法相宗、次に融通念仏宗、次に時宗、次に日蓮宗、次に三門徒派、次に誠照寺派、次に山元派、次に出雲路派、次に木辺派、次に興正派、次に仏光寺派、次に高田派、次に大谷派、次に本願寺派、次に曹洞宗、次に

各地の新聞よりみた長崎から京都までの仏骨奉迎

黄檗宗、次に永源寺派、次に円覚寺派、次に大徳寺派、次に東福寺派、次に建長寺派、次に妙心寺派、次に南禅寺派、次に建仁寺派、次に相国寺派、次に天竜寺派、次に西山派、次に真言宗、次に真盛派、次に寺門派、次に天台宗と一派十人去て一宗数十人來り、幾万とも知れざる円類は累々として重なりつ。黒、紫、紅、茶いろくの法衣の左右には、金銀諸色の扇面恰ながら蝶の紛飛する如く閃めき、頭上には幾十丈の白虹とも覺しきテント連りて、徐々混々と其下を練り来るさま実に非常の偉觀なりし。此行列の半ば進みし頃、即ち午後二時三十分いよいよ大師堂より鳳輿を出すこととなり、五十名の樂僧は嚟亮たる樂を奏するに、連れ堂衆は徐々宝輿を昇き階下に至り、法主はこの処にて奉送なし、一同列を整へて出けるが、其光景は天台宗に次ぎて六金色の旗二旒飄へり、次に各宗管長、次に村田総理、次に暹羅公使、徐々として歩し、次に樂師五十名絶へず嚟亮たる奏樂をなし、次に紅色錦欄に仏の一字を繡とりたる仏旗を飄へし、次に青地錦の天王旗二旒閃き、次に宝輿は燦爛たる金色の光を放ち纓絡など相触れて錯々たるも厳そかに、次にまた青地錦の天王旗風に斜めに、次に奉迎正使、次に奉迎使、次に奉迎使随行、次に奉迎委員、次に各宗門跡、次に各宗派本山住職、次に各宗派重役、其他各宗派僧侶、各団体総代、各宗派講中等にて其数幾万なりしか殆んど計るべからざりし。

かくて同行列の先発は、午後二時五十五分妙法院に着し、宝輿の同じく着したるは同四時二十五分にして、全院宸殿勅使門より昇

入れ車寄の処にて、僧侶は堂衆に代り手舁にて宸殿戸帳の中に入れんとせしが、宝輿の大なる為め入るゝ能はざるにぞ、其前なる板間に輿台を置いて仮奉安なし、三方は簾を下し莊嚴をなし、池の坊の立花一对、挿花二対を供へ、蠟燭を点じ全く終りしは全四時五十分にして、宝輿の勅使門を入るや多くの列員の入るを防ぎ、並に他の雑沓を制する為め全門及び北の門を閉鎖せり。

仮奉安式

かくて午後五時を報ずるや、宸殿仮奉安所にて仮奉安式を挙行せるが、其装飾を記せば、正面には宝輿を奉安し、前には白絹の戸帳を垂れ、三方は簾とし、椽端三方には五色の幔幕を繞らし、宸殿車寄前には六金色旗四本、仏旗、天王旗、本山旗等を押立て、又宸殿前には六間に五間の遙拝殿を新築して、其前に隠元形灯笼四個を釣し、鯨幕を繞らし、勅使門にも紫の幕を繞らし、大六金色旗を交叉し、其傍らに本山旗を掲げ、六金色旗を四方に蛸釣せり。

かくて式を初むるや先づ三方の簾を上げ、暹羅公使を始め韓国外務大臣趙義淵氏等は、宸殿東北の間に列坐し、総理、正副使、各奉迎使、各宗管長、門跡、資格ある一寺院住職等百余名は東南の間に、その他各宗信徒は西の間に列坐し、法鼓三声を合図に奏樂ありて仮奉安式の法要あり。夫より一全順次宝輿の前に進み焼香なし、全く終りしは全五時二十分なりし。また全式の終るや勅使門を開き、行列に加はりたる信者を遙拝所に入れて焼香を許したが、最初は百名許りづゝ入れたれども、何分多くの信者として俄

然大波打て推寄せつ、我一に焼香せんとせるより、警部巡查は必死となつて之を制し、漸やく静肅に終らしめしは午後六時頃なりき。

参列の門跡管長

此日参列の門跡管長は左の如し。

天台座主中山玄航、真言宗長者代和田大円、青蓮院門跡三津玄深、曼珠院門跡山岡灌頂、三千院門跡梅谷孝成、曹洞宗管長代北野元峰、西山派管長代岩瀬口雲、妙心寺管長小林崇輔、本願寺管長代土山沢映、真盛派管長代石山覚湛、黄檗宗管長代鈴木瑞空、興正寺派管長花園沢称、誠照寺派管長二条秀源

また左の五管長は行列には加はらず、妙法院に先発し同勅使門にて奉迎せり。

南禅寺管長量日毒湛、建仁寺管長竹田嘿雷、東福寺管長濟門敬冲、相国寺管長中原東岳、華嚴宗管長佐保山晋円

奉迎 余 聞

焼香者 阿弥陀堂に於ける焼香者にして僧侶ならざるは、楠地方裁判所長、井上本府警部長、川越陸郡大尉にして、又韓客趙義淵、米国費府大学講師ウツト両氏は、台湾忠魂堂発願人、源正寺祖父江聖善師の紹介にて焼香せり。

日焼 正使光演師、元来白面の美男子なりしも、今見違へる如く楮く焼けて帰りたり。これ蓋し師が奉迎に関する唯一の土産なるべし。

大演説場 烏丸七条下がる大谷派工作場に於ける三十六時間の

演説会場は、三百帖敷のテントを張り設けたるものにて、遠国より参詣せしものをして宿泊旁々傍聴せしむるの仕掛なりし。

竿頭の電灯 宸殿唐門内両脇の六金色仏旗の竿頭に、昨夜より孤状灯を点火す。

警官配置 京都府警察部は各署に訓令し、市内各警察署警部及非番巡查を出し、且つ盜難予防の為に、沿道三間に一人宛角袖巡查をも配置したり。

警眼炯兮 大坂南区天王寺田中義三方小泉米雄^(十八)、同西区三軒家字今木吉岡吉三方西田精三^(十九)、同東区常盤町二丁目山本寅吉方山本竹松^(十七)は、一儲せんとして十時過の列車にて當地に來り、本願寺の南門を入らんとするを、塩小路分署の山本八住の二刑事の為に取押へられたり。此三人は何れも前科九犯を有する搦摸なれば、もし捕られずして徘徊せしには非常の被害者を見しならん。又大宮通寺の内上る大塩虎吉^(二十)なる前科十犯の箱乗は、午後二時頃麴屋町五条上る処にて、奉迎人の懷中に手を入れんとするを五条署の井口、笹山、植村三刑事が認め、逮捕せられたり。

降客 午後一時までの京都停車場の乗降者は、京都鉄道よりの分一千五百六十人、官線の分一千三百七十人なり。

入場券数 京都停車場に於て、仏舍利奉迎の爲め売出したる入場券は、千二百余なりし。

医員と看護婦 六条生命保険会社は、臨時病人を保護する玄關の次間に、医師六名、看護婦十二名を詰切らせ、之れが手當の用

各地の新聞よりみた長崎から京都までの仏骨奉迎

に供したり。

妙法院附近 混雜は申迄もなきが、イザ宝輿が着といふ場合には、人波の爲め竹矢來數十間碎けたれども、幸に怪我人はなかりし。

賽銭 宝輿の通過の時、篤信者の賽銭を投じ、念仏唱名するもの非常に多かりし。

玄鹿館の写真 昨日玄鹿館の撮影せし行列は八枚続なりと。

菓子 昨日参列者には、雲中唯我独尊の文字あると、大菩提会の紋所三ツ蓮華のある山慈姑製の菓子を饗せり。

三階崩れんとす 五条大橋東詰、田中瓦商店の二階三階には、多数の奉迎者登りたるため、重力に堪へずして崩れんとせしを、松原署の巡查が注意し人を降らしめれば、不幸を見るに至らざりし、又同楼上にて行列を写真せるもの二三を見たり。

電車と配達 京都郵便電信局五条支局の郵便電信の配達人が、行列に妨げられて同局門前に立往生せしは氣毒にして、電車が無遠慮に屢行列を横りしは、にくさげなりし。

氷水菓子 妙法院大仏両境内等、氷水屋菓子屋の露店充滿せり。其氷屋の儲けたるは勿論の事。

卒倒 高倉通五条上る井上豊吉^(五十一)、油小路七条上る友長三次郎^(二十)は、五条通高倉東へ入る処にて卒倒し、警官は近傍の医師に治療せしめしに直に快復したり。

面の皮 幾万の群集が今や遅しと停車場前に待ち居る時、停車場楼上の料理室の窓より、二人の男子を相手にして瞰下し、堵列

の門徒を指し微笑囁々せる三十前後の婦人あり。一、鬢大呼して曰く、面の皮は何枚張じやと。婦聞かざる如す。

●仮奉安会 仏舍利仮奉安会は、今二十日より三日間、各宗派開宗派順を以て正式法要を営む筈にて、今二十日は天台宗各派合同して、座主中山玄航師導師となり法華会を修し、臨濟宗八十派合同して東福寺管長を導師とし法要を営むと。

●大阪出發 仏舍利は昨午前六時天王寺出興。行列は凡て來着の時と同一にして、六時三十分天王寺駅發車、七時十分梅田停車場に着。樓上に休憩、同三十分發車、京都に向ひたり。沿道拝觀の善男善女幾万といふ事を知らず。又両停車場近傍に於ては絶へず烟火を打揚げたり。

仏舍利奉安彙報〔明治33年7月21日 第四七五三号〕

仮奉安会 仏舍利仮奉安会は、昨日より明日まで三日間、各宗派開始順次に依りて仮奉安殿なる妙法院宸殿に於て行ふに付、昨日午前九時三十分より天台座主中山玄航師導師にて妙法院、青蓮院、曼珠院、三千院、毘沙門堂、滋賀院以下十六寺院の僧正參列し、法華三昧を修し十一時終了。午後一時より臨濟宗南禪、天竜、建仁、東福、相国五山、妙心、大徳二山、永源寺、円覚寺の各派、黄檗宗等七十名合同し、導師は年長者たる東福寺の濟門敬冲和尚の筈なりしも、都合にて建仁寺の竹田嘿雷和尚導師となり、楞嚴咒行道を修行し、午後二時三十分終了。午後三時より曹洞宗の番なるを申合せ繰り替て、時宗管長代理大僧正河野往阿

(兵庫真光寺) 師導師となり三十名の職衆にて日中礼讃を修行し、四時三十分修了したり。又今廿一日は真言、日蓮、曹洞、華嚴、律、法相等諸宗の法要を行ふよし。

暹羅公使 暹羅国公使、同書記官の一行は、岩本山本二氏と、大谷派本願寺枳穀邸に両法主に招待せられ、鄭重なる洋食の饗応を受け、尚園内隅なく觀覽の上臨池亭に薄茶を饗せられ、余興には狂言藪猿、悪太郎、墨塗等あり。両門主と種々親密なる談話あり、四時退出せり。今廿一日は洛北妙心寺金閣寺に到りて、猶妙法院仮奉安殿を參拝して焼香し、明廿二日も同様參拝するが、多分廿五日頃歸東のよし。

仏舍利受授式 仏舍利は、去月十五日暹羅国より受取りし以來、奉迎使前田誠節、日置嘿仙兩副使、妙法院に交代し詰め居るよしなるが、明後廿三日妙法院に於て、各宗派管長、奉迎事務総理、奉迎事務常任委員等參集し、午前九時より奉迎正副使より、世尊の靈骨を右各管長其他へ受授するよし。是れには暹羅国公使も立会と云ふ。

奉安事務所 積尊遺形奉迎事務所は、明廿二日限りとし、廿三日より奉安事務所と改称し、其他の役名も之に準ず。従て村田寂順師は、大菩提会理事長及奉安事務総理と改称すべしと。

●大谷派両法主の親諭 仏舍利奉迎使、無恙帰朝に付、大谷派本願寺にては已記の如く、昨日午前十時より大宸殿に於て両法主の親諭あり。來京の諸国講中に、門徒は午前八時頃より追々詰め

掛け、近來稀なる人数にて、其中にも尾張最も多く、海西海東兩郡の如きは、毎戸に留守番を抽籤にて定め、老若男女打連に來京せし有様にて、此他三河、美濃其他の人々、大宸殿に押詰め、外部広椽まで立錫の余地なきまでの有様なり。斯て各連枝、寺務、法務、式務の諸役員、学師、勸令使、布教使等参着し了て、十時二十分法主出坐し「此度各宗管長より、釈尊御遺形の奉迎を予以依頼し、暹羅國に參らねばならぬ事なりしも、事情止を得ず法嗣光演を遣はせしなり。此事は不可思議の因縁として、予は明治初年の頃彼地に航し仏蹟を拜したり。今亦法嗣靈骨を奉迎し、無恙歸朝す。此上は予て示せし法義相統を大切にし、愈よ王法為本の道を守り、仏恩報謝の心懸を篤くする様、云々」との親諭あり。次に新法主出坐し「四月二十二日本山を出発せしより五十九日にして、暹羅國より靈骨を受け取りし事、皇帝陛下に謁見の事、國賓として待遇厚かりし事、勅諭を賜ひし事、各宗派一体へ宮中宝庫の御物たる仏像一体を賜りたるを、猶同一体を大谷派本山に賜りたること、此上は殿堂を建て、御安置に關しては何なりとも無遠慮に申送らるべき聖旨の事より諄々釈尊の事に及び、弥よ仏恩奉謝の念を篤くすべき事等、帰國の上隣國鄉村に伝へる様との親諭あり。南条文雄師は、両法主の親諭を敷演し、十一時三十分修了し散會したり。

仏舍利奉迎彙報 (明治33年7月22日 第四七五号)

昨今の法要 仏舍利奉安會は、昨日も前日に引続き宸殿に於

各地の新聞よりみた長崎から京都までの仏骨奉迎

て修行せり。其順序は、午前八時より真言宗は大仏智積院に參集し、正式法衣を着し、大僧正原心猛師導師と為り、整列して同院より練り出し、勅使門より入りて宸殿に上り、午前九時より理趣三昧の法要を修せり。参式は古義八本山、新義二本山住職以下三十五名にて、同十時三十分終了。同十一時より日蓮宗十六本山以下三十名中より、妙顯寺大僧正河合日辰師を導師とし、礼法華式を修し午後零時三十分終了。午後一時より曹洞宗は永平寺總持寺を始め四十名にて、大僧正北野元峰(東京青松寺)師導師となり、楞嚴呪行道を修し午後二時終了。午後二時三十分より法相、華嚴兩宗合同して、東大寺大僧正佐保山晋円師導師として、舍利礼式を修したり。参列は八名にて午後三時三十分終了。午後四時より真言律宗は、西大寺大僧正佐伯泓澄師導師として、是れも舍利礼式を修す。参列は是又八名。午後五時終了し、是れにて當日は退散したり。又今廿二日は、前日に引続き午前は浄土宗西山派、本派本願寺、午後は大谷派本願寺、融通念仏宗法要を修する由。

大谷派新門主 大谷派新門主大谷光演師、奉迎正使として無事歸朝せしに付ては、小松宮を始め貴顕より祝辞の電報郵便多く來山するよし。又久邇宮賀陽宮よりは、出發の際御使を賜りしを以て、新門主は昨日午後兩宮御本邸に伺候し、夫より村雲尼公、善光寺大本願尼公、伏見宮滞在の一条、松寿院御方塔之團の二条、清岡院御方、高崎府知事、楠裁判所長等を歴訪したり。招待 本日は午前十時よりの法瑩に、京都府知事以下高等官裁

判所長、検事正主婦寮出張所長、税務管理局長、郵便電信局長、貴衆両院議員府市会議長、市長、区長、大阪府知事、滋賀県知事、其他総て二百名計りを招待せり。

献供 一昨来宸殿に献供ありし物品は、鳩居堂より銘香一箱、六角堂池の坊より立花一对、吉田藤助、近藤紋次郎より拝殿に備ふる大香炉にして、又馬町有志者より、馬町北門外へ紅高張台傘付提灯二対を寄附したり。

●暹羅公使の訪問 滞京中の同公使は、昨日午前九時高崎知事を官邸に訪問し、帰路内貴市長の自邸を訪問せしも、来客多く為めに面会し得ざりし為め、市長は更に京都ホテルに同公使を訪問せり。

仏骨京都に着す〔明治33年7月23日 第四七五五号〕

路傍の拝観者堵の如し、而も崇敬の体を具へたるもの渺かりしとは、拝観者の一人のいふ所なり。拝観者の多く都会人士なればにや。

仮奉安会最終法要〔明治33年7月23日 第四七五五号〕

仏舍利仮奉安会は、再昨二十日より三日間妙法院宸殿に於て、各宗派順次行ひつゝあることは已記せしが、昨廿二日は其最終日として、在京都各高等官紳士等を招待したり。仮奉安殿の莊嚴は、内陣黒地金菊御紋の水引の内に白絹の几帳を垂れ、其内に仏舍利を納めたる宝輿を安置し、青地金欄の打敷にて供饌卓を覆ひ、こ

れに精饌三台菓子十台を供へたり。午前八時三十分より浄土宗西山派は、誓願寺大僧正久田做道師導師となり、禅林寺吉水僧正以下廿八名参式し、奏樂を以て昇殿し、先献香拝礼、奉請文、散華、嘆仏偈、阿弥陀経、舍利礼文、三称仏名、後唄、三拝奏樂を以て退散せしも同九時三十分にて、同十時より真宗興正寺派は、管長華園沢称男導師となり、連枝竜虎院華園曉信師以下結衆十二人にて、三奉請、漢音小経、甲念仏、回向、等勤行中、真宗三門徒派管長代平光円師、真宗高田派管長代竹内宣闇師、高崎京都府知事以下高等官紳士焼香あり。午前十一時三十分より本派本願寺と木辺派錦織寺合同し、本派管長大谷光尊伯代理として、連枝普照院近松尊定師、木辺派管長木辺慈孝男代理として、土山沢依師、何れも導師となり、結衆十二名にて阿弥陀懺法を修し、午後零時三十分修了し、午後一時より真宗仏光寺派新門主渋谷隆教男は、参動僧侶院家以下二十四名を率ひ昇殿先献香、伽陀、阿弥陀経、念仏、和讃、回向、総礼等法要中に、真宗誠照寺派管長二条秀源師拝礼焼香あり。午後一時終了し、同一時三十分より融通念仏宗は、管長代理僧正清涼得善（摂州喜連法明寺）導師となり、出勤僧十二名にて奏樂入殿、香偈、声明、七奉請、各体、降臨偈、三拝、日中歎仏、浄三業、十念、経段、寿量品、撰取文、融通念仏、大恩教主、恩謝回向等、以て午後二時三十分終了し、同午後三時より最終法要として、大谷派本願寺は管長大谷光肇伯大導師となり、淳信院大谷蛭温、恵日院大谷勝信の両連枝と共に参勤職衆十八名にて入殿、直ちに大導師登高座、加陀、導師三礼、

衆僧三礼、嘆仏偈、大導師以下行道散華、伽陀、大導師下高座、導師三体、一同総体退散ありしは四時三十分なりし。此日両本願寺、仏光寺、興正寺等真宗各派の法要とて、在京都及び近村門徒の参詣せしもの多く、又暹羅国公使行當りしは、正しく人にて或る家の生垣をのび上り、家内の様子を窺がふ体にて、後ろの人音しらざりしが、騒ぎに気づけば立派なる屋敷風、自分の為めに大道へ倒けつ転びし、負傷せし体、コリヤ粗忽だ御勘弁と逸足出して逃んとするを、下部はムツと引捉らへ「ヤイ此町人太い野郎だ、おらが嬢様を負傷させて済むと思ふか、コリヤ何誰様だと思ふ。土居様の御留守居安藤清左衛門様のお嬢さまだぞ。済まぬく」とひしめきたり。「ア、御勘弁く土居様でも安藤様でも存ぜぬ事なら。イヤまてよ土居様と。夫では御池堀川のお屋敷の土居様、安藤様と仰しやりますか。コリヤ不思議。「ナニ不思議も入るものか済まぬく。

仏舍利受授式（明治33年7月24日 第四七五六号）

昨日午前十一時三十分妙法院宸殿なる仮奉安殿に於て、既記の如く暹羅国公使立会し、奉迎正使奉迎使と各宗派管長、奉迎事務総理、各宗派奉迎委員との間に仏舍利受授式を行ひたり、先是午前十時三十分、宸殿周囲に深く幔幕を垂れ、各宗派管長、管長代理三十七名、事務総理、奉迎委員二十三名、正使随行者二名この内に入り、暹羅国公使書記官等着席するや、奉迎正使大谷光演師及奉迎使前田誠節、日置嘿仙二師先づ拝礼宝輿を開扉し、仏舍利を

納めたる同函を室中の掉上に奉安して、各自席に着き受授の辞を述べ、次で天台座主以下各宗派管長順次拝瞻し、次に村田総理、暹羅国公使、奉迎事務常任委員、各宗派奉迎委員等拝瞻し了て、村田総理進んで暹羅国より仏舍利分贈に係る謝辞及奉迎使に対する謝辞を述べ、奉迎正使及暹羅国公使之に対して答辞を述べたて、村田総理金函を奉鎖し、一同式場を退きしは午後一時なりし。村田総理が公使に対して述べたる謝辞、并に公使の答辞は左の如し。

積尊遺形奉迎事務総理、妙法院門跡大僧正村田寂順謹で、暹羅国王陛下の全権公使リチロングロナチエト侯爵閣下に白す。

閣下は貴国王陛下の聖旨を奉じ、此積尊遺形奉迎の時に當り、遙に東京より来り其式に臨み、驕陽赫々の日敢て其勞を辞せず。吾国の儀式に遵ひ徒歩参列の員に加はり、数日間此地に滞在し、時々法要に参会し、本日亦授受の式に臨まる。国王陛下深甚の歡旨と醇厚なる慈恵とに因ると雖ども、閣下の忠愛親切にして、仏法の為め我国の為め深く其心を尽ざるゝに非んば、豈能く此の如くならんや。吾国仏教徒は
国王陛下の特恩と積尊遺形と俱に、閣下の忠愛なる厚意は永く記して忘れざるべし。今吾国各宗を代表し、爰に此書を奉ず。敢て請ふ、閣下亦永く紀念と為さんことを。

明治三十三年七月廿三日

積尊遺形奉迎事務総理

妙法院門跡大僧正 村田 寂順

暹羅国公使の答辞

各管長猥下、総理猥下、及各高僧榻下、余は今懇到なる村田総理猥下の謝辞に接し、汗顔に堪へざるなり。余か勞は之を各位日夜の尽瘁に比すれ、真に万か一にも當らず。余は却て各位か国を愛するの深き、即ち法に尽くすの大なる此の如きを致すに感激するものなり。

抑も貴国仏教の益々興隆ならんことは、我国王陛下の深く希望あらせらるゝ所にして、奉迎使猥下等の親しく 竜顔を拝して承はられたる所なり。

而して勅命を蒙りて、特に東京より来り会したる余か、盛大莊嚴なる古今未曾有の式に列し、無数人民の熱心なる歡迎礼拝を目撃し、又且つ数日の間此山美しく水清くなる都に滞在して、諸本山及靈場を拝し到る処優待を蒙り、今又茲に積尊遺形受授の式滞りなく結了せられたるを視て、具さに之を陛下に奏報し奉るの時、如何に御機嫌麗はしくあらせらるへきかを想像し奉るに余りあり。今や余の任務を終へ袖を各位と別かたざるべからざるに臨み、時に一言呈し置度ものあり。今回の奉迎に於て、礼拝人民の夥しき、参列僧侶の多き、儀式の盛んなる、設備の美なる、真に前代未聞なりと称せらる。之れ誠に然らん。然れ雖余の特に喜び且つ感じたるものは、仏教各派が漏なく賛同結合したるにあり。法の為に一切の情実を忘るゝにあり、親睦団結の固くして外教徒をして驚嘆せしめたるにあり。此美德にして存する限り、仏教盛んならざるを得ず。切に望むらくは

仏教各派を代表する各位が、永く此心を以て心とせられ、何等の場合に於ても常に仏教全体の為めにする事を忘れず、相助け相励み世界に卓絶せる此教をして、愈盛大ならしめざれんとを。

明治三十三年七月廿三日

積尊御遺形受授式場に於て

リイチロンロナチエトシヤム国

全権公使侯爵 リチロングロナチエト

●奉安領事 仏舍利奉迎事務所は、前項の如く昨日受授式を了りに付、奉安事務所と改称し、仮奉安中は各宗派一ヶ月を一期とし、二名以上の僧侶を以て交番常任せしむるよし。▲天竜寺管長 峨山和尚は、故高橋健三氏一週忌追悼の為め東上中なりしが、一昨日帰山せしに付、昨日は七十名の雲衲を率ひて参拝したり。

暹羅公使帰東〔明治33年7月25日 第四七五七号〕

仏舍利奉迎に付、滞京中なりし暹羅国全権公使は、昨日午前七時五十六分発列車にて帰東したり。右に付、奉迎委員総代として妙心寺の□□□師名古屋まで見送ったり、尚京都停車場に見送りしは、高崎府知事、楠地方裁判所長、前奉迎正使大谷派新門主大谷光演、同副使妙心寺派前田誠節、曹洞宗日置嘿仙三師、奉迎事務総理村田門跡、竹田建仁寺管長、中原相国寺管長、各寺院管長代理、大谷派本願寺石川参務、和田准参務、本派本願寺水原顧問、奉迎委員総代蘭光轍、村田豊亮其他数名なりし。

「朝日新聞京都附録」

釈尊遺形仮安置法要（明治33年7月21日 第六六三二一號）

釈尊の遺形は、宝輿に納めたるまゝ、妙法院の寢殿に安置せられたるが、一昨十九日午前九時より、天台宗管長中山玄航師導師となり、十六名の同宗僧侶（寺門派を除く）と共に、法華三昧の法要を修め、同十一時三十分終了。午後一時よりは竹田嘿雷師導師となり、妙心寺、天竜寺、大徳寺、南禅寺、東福寺、建仁寺、永源寺、相国寺、万福寺及び時宗等各派の僧侶七十名、楞嚴經を修めたり。尚今日は真言宗、日蓮宗、曹洞宗、華嚴宗、真言律宗、法相宗の各宗僧侶法要を営み、明二十日は西山派、真宗各派、融通念仏宗の各宗派同様に法要を修む由。暹羅国公使は、昨二十日午前十時、妙法院の仮安置所にて焼香参拝せり。尚二十二日午前十時より、在京都高等官、市の名譽職、其他奉迎に關し効勞ある人々百余名を招待し、参拝焼香せしめ粗齋を饗する筈。

暹羅公使（明治33年7月22日 第六六三二二號）

仏骨奉迎のため、過日来當地に來りて京都ホテルに宿泊し居れる、暹羅公使侯爵ロナチヘット、リシオロテー氏は、一昨日妙法院寢殿に至り仏骨を拝し、夫より東本願寺枳殻邸に抵り、洋食の饗應を受け、光瑩、光演両法主出で、接待し、臨池亭にて薄茶を喫し、狂言の余興あり。午後四時帰館。昨日は午前、洛北金閣寺

各地の新聞よりみた長崎から京都までの仏骨奉迎

に抵り庭園及宝物を觀、夫より妙心寺に抵りて殿堂宝物を觀覽し、一旦旅館に歸りしが、午後は復た妙法院に赴きて、仏骨を拝せん筈なりき。

菩提会と慈善財団（明治33年7月22日 第六六三二二號）

仏教各派の設立せし夫の大菩提会は、已に仏骨をも迎へ來りし上は、其予期の事業、即覺王殿建設及慈善、教育兩事業に着手せんため、是よりは其資金の募集に着手すべし。然るに西本願寺は慶記せし如く、右の大菩提会には加入せずして、単独に慈善財団を組織し、已に創立事務所を置き、又其役員をも任命し、来る九月下旬頃までには其發会式を舉行せん予期なる由にて、夫よりは義捐金の募集に着手すべく、此兩団体の為す所は、遂に競争の姿となるべしといふ。

暹羅公使（明治33年7月23日 第六六三二三號）

昨日午前は西本願寺に抵り、執行大洲順道師の案内にて兩堂に参拝し、飛雲閣、鴻の間、虎の間、白書院、黒書院其他の殿舎を觀覽し、午後妙法院に抵りて例の如く釈尊遺形を拝したるが、今日は同院に於て行ふ釈尊遺形拜受式に立会ひ、明日は一日休息し、二十五日發途歸東する由。

仏骨安置法要其他（明治33年7月23日 第六六三二三號）

予記の如く妙法院寢殿に於て行ふ仏骨仮安置法要是、一昨二十一

日真言、日蓮、曹洞、華嚴、法相、真言律の各宗順次各別に之を修行し、昨日は浄土宗西山派、真宗興正寺、本派本願寺、木辺派、仏光寺、大谷派本願寺、融通念仏宗、孰れも管長若くは法主等導師となりて修行したり。又昨日は在京都の高等官、貴衆両院議員、府市会議員、市長助役、新聞記者等百余名を招きて、参拝せしめ齋を供したるが、今日は各宗管長、暹羅公使立会の上、迎齋正使たる大谷光演師より仏骨授受の式を行ふよし。

宗界雜聞〔明治33年7月25日 第六六三三五号〕

▲東本願寺の新法主大谷光演師は、仏骨迎齋の役目を無事に勤め終りたれば、休養のため両三日内京都出発舞子に赴き、暫時同地の別荘に滞留すべしとなり。▲仏骨は當分妙法院の寢殿に仮に安置することとなるが、各宗の僧侶交代守衛し、尚允精巡查の出張を願出たり。▲一昨二十三日妙法院寢殿に於て、仏骨迎齋正使より各宗管長へ仏骨を引渡したる際、各管長は孰れも正装式に列し、光彩粲然たる中に一人の骨格偉魁なる僧あり。墨色の麻衣を纏ひて自若たりしが、此異彩の僧こそ天竜寺の橋本峨山和尚なりけれ。

雜費記〔皓台寺所蔵〕

明治三十三年七月十一日ヨリ十五日迄

釈尊御 遺形 御上陸法要雜費記

庶務課

収入部

一金七百七拾参円拾弍錢五厘

内訳

金七百拾弍円六拾七錢五厘

入金金并二
香資

金六拾円四拾五錢 賽物

計如高

記

第一号 ○一金五円拾壹錢五厘

十一日十二日十
三分餅饅頭代
向井店

第二号 ○一金拾参円四拾錢 同

人夫弍拾八人
長崎衛生會

第三号 ○一金八円五錢

立花 七星堂

第四号 ○一金拾円

田口屋

第五号 ○一金拾七円八拾錢

十二日十三日
弁當共

第六号 ○一金五拾円四拾参錢五厘

知庫寮

第七号 ○一金五拾七円五拾九錢五厘

典座寮

第八号 ○一金七円七拾参錢四厘

大工 松崎熊吉

第九号 ○一金九円六十錢

現 白菊盛 肥塚本店

第十号 ○一金四円也

現 日雇頭 松尾丈之助

第十一号 ○一金拾六錢也

領收證アリ 現金支払

○一金壹円弍拾七錢

現金支払庶務係雜費

○一金八拾四錢

現金払 名耕千枚并二治字

第十三号 ○一金弍円三拾五錢七厘

典座寮

第十四号 ○一金拾円九拾五錢

菓子 福沙や

各地の新聞よりみた長崎から京都までの仏骨奉迎

第十五号	○一金八円廿銭	人夫	長崎衛生舎	○点八未払ナリ
	一金参拾八銭	現金払	豊系代	右之通精算候也
	一金五拾銭	現金払	<small>林正導 館内より暗 台寺迄往復車代</small>	明治三十三年七月十五日
	一金壹円四拾銭	現金	沈香五種香	庶務係
	一金参拾五銭	同	半紙一束	浅田純夫
	一金四拾銭	同	庶務所ラムネ	有馬寛竜
	一金壹円	同	生花	高木竜法 [㊦]
第十六号	一金拾九円七拾八銭	十四日 同	弁當	石田界雄
	○一金四円参拾八銭	饅頭	向井屋	江口竜 [㊦]
第十七号	○一金貳円	人夫四人	田口屋	樋口湛時
第十八号	○一金壹円貳十銭	十四日	典座寮	石田知寛
第十九号	○一金五円拾銭	十五日	典座寮	会 計
	一金拾貳銭	現金	中画仙紙二枚	城後定吉
	一金拾四銭	同	百円掛紙一帖	別二
	一金壹円九拾五銭	同	停車場係□人力車代并 茶小屋	一金四拾八銭 名刺六五枚
第二十号	一金拾三円八拾八銭	同	法要係雜費別帳アリ	一同六拾銭 日置師車代
第二十一号	○一金壹円七拾八銭	蒲団蚊帳	高楷店	合計金貳百九拾円拾四銭六厘
第二十二号	○一金参円五拾銭	大工	松崎熊吉	此内
第二十三号	○一金九円五拾銭	十四日ヨリ十五日迄	知庫寮	金五拾六円八十五銭 現金支払分
	一金六円	十五日	弁當	同貳百三拾三円貳十九銭六厘 未払分
	○一金八円廿銭	十五日 人夫	長崎衛生舎	御受
計金	貳百八拾九円〇六銭六厘		一金参拾円	當寺え会积として
			一金五円	副使當在会积として

一金五円 役僧中え

右惠寄へ預り
御寄贈被下 正二拝納致候也

明治三十三年七月十六日 皓台寺

积尊御遺形

奉迎事務出張処御中

第六号

記 但常什品取替現金表

一金貳円廿五銭

石油壹斗五升

一金七拾参銭五厘

種油壹升五合

一金参円五拾銭

炭七俵壹俵五拾銭かへ

一金壹円〇五銭

蚊帳蒲団借代

一金壹円

藁草履百足

一金壹円廿銭

茶参斤

一金貳円六拾銭

蠟燭拾貳斤

一金拾貳円五拾銭

薪代百斤五十銭かへ

一金壹円

朱肉代

一金六拾銭

半紙貳束代

一金貳拾四円

折壹千代

〆金五拾円四拾参銭五厘

右之通ニ御座候也

明治卅三年七月十三日

佐伯日宗[㊤]

総計高

金百貳拾六円拾八銭七厘 知庫寮典
座寮分

第七号

奉迎當時来会者遣したる折詰原料

記

一金貳円六銭

雑穀屋西国屋分

一同参円廿銭

漬物屋浅田屋分

一同八拾七銭五厘

蒟蒻屋分

一同五拾金銭

昆布屋竹下分

一同拾六円八拾銭

米屋三上分

一同拾五円貳銭

乾物屋中山分

一同五円廿貳銭

豆腐屋宮本分

一同貳円五拾壹銭

築町野菜屋払

一同七拾五銭

酒屋払

一同六円七拾五銭

人夫 拾三人半

一同壹円五拾銭

女子加勢人

一同貳円四拾銭

醬油屋払

計金五拾七円五拾九銭五厘

明治卅三年七月十三日

典座

石原大溪[㊤]

仏骨奉迎事務処

御中

第十三号

決算書

一金壹円〇式錢貳厘

副使米価支払料

一金壹円拾錢五厘

同使野菜料

一金二拾參錢

味噌醬油代

計貳円參拾五錢七厘也

右の通りに御座候也

典座

明治廿三年七月十四日

石原大溪

仏骨奉迎事務処御中

請求書

一金四円五拾錢

十四五両日間人夫九人分

一金六拾錢

同両日間女子加勢人四人分

×五円拾錢

右の通りに御座候也

典座

七月十五日

石原大溪

仏骨奉迎事務課

御中

第十八号

副使殿昨夜より本日上膳雜貨

一金七拾八錢

野菜料

一金二拾四錢

豆腐屋払

一金拾八錢

漬物屋払

計壹円二拾錢

右の通りに御座候也

七月十五日 典座石原大溪

仏骨奉迎事務課

御中

第廿三号

請求書

一金四拾錢

茶壹斤

一同貳円五拾錢

炭五俵代

一同壹円三拾錢

蠟燭六斤半

一同四拾九錢

種油壹升

一同九拾五錢

石油六升

一同壹円貳拾五錢

薪二百五十斤

一同三拾錢

角線香大十羽

一同三拾五錢

蚊帳蒲団二人分

一同五拾六錢

土瓶七ヶ破損分

但シ一ヶ八錢之見積

第十九号

各地の新聞よりみた長崎から京都までの仏骨奉迎

一同四拾錢

茶吞茶碗廿ヶ破

三十錢

梅津二人前 典座和尚殿

但シ一ヶ二錢之見積

壹円

西島六人前

一同壹円

炭二俵

壹円

ヲタカ六人前

十四日前之分 但付落之事

壹円五十錢

下男三人分但五日

〆九円五拾錢

壹円

初造五日分

右之通に御座候也

五十錢

市太郎五日分

知庫

壹円 參十錢

直松五日分

佐伯実宗

五十錢

豆婦屋二人分

六十五錢

独竜

二十五錢

海蔵菴殿分

同

円勝

〆七円三十五錢

六十錢

準法

正渡方ノ分

同

有隣

十三円三十五錢

壹円十錢

副寺

差引殘金

同

典座

六円也

同

知庫

記

六円七十五錢

十一月ヨリ三日分 拾三人半

壹円五十錢

同 女人夫十人分

四円五十錢

十四日 人夫九人分

六十錢

同 女人夫四人分

〆十三円三十五錢

右之〆辻ハ菩提員ヨリ請求ニ応寺納分

記